
プリズマ イリヤクロス2wei

わかな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリズマ イリヤ クロス2wei

【Nコード】

N35530

【作者名】

わかな

【あらすじ】

プリズマ イリヤとFate/staynightのクロスです。

冬木の地に突如現れたクラスカードから出現するサーヴァントの現象はとりあえずの終結をみた。

ただし、本来ならばありえなかった介入者たちの存在を残して。

そして、新しい物語が幕を開ける。

もう一人のイリヤが現れて巻き起こす騒動に、介入者たちはいかに

関わり、一体どんな終結を迎えることになるのか。

前作、プリズマ イリヤの完全な続編です。

プリズマ イリヤを读了してからお読み下さい。

ショートストーリー その1

「いやよ」

凜からの提案にリンは思考時間ゼロで即答する。

「あのねえ。こっちのことも少しは考えてよ。あんまり目立ちたくないのよ」

「逆に自分がその提案をされたときのことを考えてみなさいよ。絶対に断るでしょ」

「そうね。確実に断るわね。でも、世間一般的な常識に照らし合わせれば、答えなんて一つしかないでしょ」

弁の立つ二人の言い合いはいつ果てるともなく続く。

「「そうよね、アーチャー」」

二人の『凜』から同意を求められ、アーチャーは苦笑する。

「戦いを生業にするサーヴァントにその手の意見を求められても困るな」

肩をすくめ、自分には無関係な話だと切って捨てるアーチャー。

「学校に通うか否かなど、そちらで決めるといい」

彼女たちが、激しく言い争っているのはリンの小学校通学についてである。

少なくとも、今日明日中に元の世界に戻るのが困難な状況である現在。さすがに、小学校に通学するはずの子供が昼日中から家の周りにいるとなれば目立つ。だから、凜はリンに小学校に行くように詰め寄っていた。

「何よ、自分には関係ないって顔して」

リンがむくれる。

だがアーチャーの言うとおり、この件に関して彼は関係無い。現在の彼の外見は、一応十代後半。少なくとも義務教育の修学年数は超えている。それでも、彼のような明らかに日本人とは異なる容貌は目立つが霊体化してしまえば問題ない。

「魔術師の基本はとにかくヘンに目立たないこと。そのために私だつて高校に通っているのよ」

自身が異彩を放っていることを自覚しているようで無自覚な凜の言葉。だが、この場にそれに関してツツコミを入れるような人物はいない。

「そんなことは、今更いわれるまでもなく百も承知よ。けど、そんな時間があるなら文献をあさって研究していたほうがずっと有意義でしょう」

二人の話はどこまでいつても平行線をたどっている。

「何がどうあっても、嫌だと」

「必要性がないのに、小学校に行くなんてありえないわ。例えば、小学校に行くことで元の世界に戻る手がかりが掴めるとか。あるいは、イリヤたちの身に危険が迫るとか。そんな理由があるなら、仕方ないから行ってあげるけど」

「……一体、どこにそんな魔法少女もびっくりな小学校があるのよ」
凛が秀麗な顔をしかめる。

「まあまあ、凛さん。とりあえず、条件次第では学校へ行くという言葉がとれただけでもよしとしませんか」

それまで、沈黙を守っていたリンのカレイドステッキがピヨピヨと凛の前に飛んでくる。

「いざとなれば、条件に合うような騒動を……」

「却下っ!!」「」

彼女が何を言わんとしているのか察した二人が即座に結論を言い渡す。

「まあとにかく。さっきの言葉、忘れないでよね」

「ふん、そのときはアーチャーもオマケにつけてあげるわよ」

「私は、付属品が何かか……」

はあとこれみよがしにため息を吐き出すアーチャーだが、当然のことながら彼の意見は流される。最初に関係ない発言をしていたの

が、ここに響いていた。つまりこの発言は、リンの当て擦りあるいは八つ当たりなのだ。

「だが、あとで自分を苦しめるような約束はしないほうが身のためだぞ、リン」

「心配ないわよ、アーチャー。そんなとんでも小学校があるなら、むしろこっちから通学してあげたいくらいよ」

自信満々の様子で胸を張る。

「キミがそう自信たっぷりだと、なぜか妙な不安に駆られるな」

アーチャーがどこか遠くを見るように目を細めた。

その数日後に。

その不安が的中することになるなど、このときは誰も予想していなかった。

第一話 現れたのは、もう一人のイリヤ

「ね、アーチャー。どう思う？ これ」

リンがアーチャーに難しい顔をして声をかける。もちろん、彼女は魔法少女の姿をしていない。赤いトレーナーに黒のミニスカートというごく一般的な衣装だ。ちなみに、ステッキは「変身しましよう、ぜび！」とうるさいので、白い布でぎつちりと縛り袋詰めにしてある。時々、モゴモゴと不満そうな声が聞こえてくるが、きつと気のせいだ。

「見たままにしか、理解しようがないのではないかね、これは？」

答えるアーチャーの方は、黒い革鎧に赤い外套という不測の事態に備えた出で立ち。

「けどこれは……」

口元に手を当て、目の前にあるものをどうにか理解しようとする。

柳洞寺の地下深くの龍穴。冬木の街で最も強い力を保有する霊地。しかし歪みも大きいため、遠坂の祖先は、冬木の第二位の霊地に居を構えることにした。その歪みは、あとひと押しさえあれば根源に至る可能性があるほどのもの。

そして、そんな歪みに目をつけたのがアインツベルン。アインツベルンはこの地で聖杯戦争をとり行うための大魔術式をここに敷いた。それが大聖杯であり、聖杯戦争の因となったものである。

「聖杯戦争がなかったということ、大聖杯もない。ううん、違う……ここには何かしらの大きな魔術式があったはず……」

凜が口元に手を当てて考え込む。この世界と自分たちの世界の違いは一体どこにあるのかと。

この世界の大聖杯があった痕跡は、物理的に消されている。あたかも、ここでは一切何もなかったかのごとく。地面がきれいにならされており、ちょっとしたグラウンドのようだ。

けれどここには微かに、けれど間違いなく魔術の痕跡が残っている。その痕跡が示すのは、かつてはこの場所に何かしらの巨大な魔術式が存在していたということ。

その魔術式に流れていた力が、式を失ったことで方向性を失いおかしな風に歪んでいるのだ。魔力に耐性のないものや魔術回路を持たないものがこの歪みに触れれば、精神を犯されることになる。そんな歪みを孕んだ力が冬木の街に流れれば、あつという間にこの街は魔都となるだろう。

今までは、その歪みもクラスカードが受け止めていた形だ。そのクラスカードの活動が停止したため、地脈の力は貯まるにまかせているような状況である。

「もしかしたら、あのクラスカードもこれが原因かもしれないな」

アーチャーの漏らした考察に、リンが顔を上げる。

「……かもしれないわね。一番最初に、クラスカードが出現したのがこの大空洞の真上。無関係とするのは早計よね」

クラスカードから生み出された黒化アーチャーと戦ったのはまだ

記憶に新しい。

「なんにしても、この場所の地脈の流れの歪みは放っておいていい類のものではない。魔力で穴を穿ち、循環の改善を図るべきだろう」

言いながら、アーチャーはどうするという視線をリンに向ける。

「まったく。元の世界に戻るための手がかりがないかなと思って、大聖杯の様子を見に来ただけだったのに」

腰に手を当て、気だるい様子で息を吐き出す。

「セカンドオーナーも、地脈の歪みには気づいているでしょうけど」

それでも間近でみなければ、そして聖杯戦争を実際に知らなければこの異常の本質はつかむことができないだろう。

「一応、伝えておきましょう。私一人ではどうしようもできないし」

「やれやれ、お人好しなことだ」

これだけ歪み溜まった地脈の力だ。上手く活用すれば、次元転移のエネルギーに転換することも可能かもしれない。だが、リンはそれをしない。

「下手に触れば、爆発するような力よ。これを転移に活用しようとなると、よほど上手くやらなければ失敗するわ。それこそ、奇跡みたいな確率。聖杯でも持つてくるなら話は別でしょうけど」

普通の魔術師ならば、あるいは他所に出る被害など無視して自身

の目的を果たそうとするだろう。けれど、彼女はそれを選ばない。

「とりあえず、ここから出ましょう。今はこれ以上ここにいても意味がないわ」

「了解した、マスター」

一組の魔術師とサーヴァントは、かつて大聖杯があったはずの大空洞をあとにした。

それより少し前。

私立穂群原学園高等部屋上にて。

二人の魔術師が一台の携帯電話に耳を当てていた。

電話機の向こう側の声の主は、現代の魔法使い、第二魔法の使い手、宝石翁などの二つ名で呼ばれるキシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグ卿。

「龍穴から、高圧縮魔力を注入し地脈を拡張しろ」

冬木市の地脈の乱れが未だ回復の兆しを見せていない状況に、ゼルレッチが次なる手を打つことにした。

「ちょっと待ってください、そんな大掛かりなことをたった二人でどうしろと……」

地脈を拡張させるほどの魔力など簡単に用意できるものではない。通常なら、魔術師が数十人で儀式を執り行うほどのものである。

「何を寝ぼけておる、お前たちにはステッキを貸しておるじゃろう」

電話の向こうの宝石翁はなんでもないのでこのように言っただけ。凜たちは小さく呻くが、それに気がつかずに話を続ける宝石翁。

「アレは無限の魔力供給が可能な特殊魔術礼装じゃ。出力が一人でさすがに心もとないじゃろうが、幸いそちらにはステッキを二本貸し出しておる。それで、魔力を地脈にぶち込めばよい」

さすが、落ちてくる月を力技で押し返すと言う荒事をなしたという伝説の人物である。地脈拡張のための手段も荒っぽい。

しかし、彼の提案が最も合理的で理にかなっていることは凜もルヴィアも承知している。ただし、そのステッキが現在彼女たちの手にないということが基本的にして最大の問題点なのだ。

「大丈夫です。ええ、大師父。問題なんて何にもありません。今日にでも、地脈を拡張します。大船に乗ったつもりで、任せてください！」

ルヴィアが後ろで頭を抱えているのを認識しつつ、凜は無意味に胸を張り大見栄を切ったのだった。

リンたちにとっては、街へと降りる道筋の途中で、凜たちにとっては、山へと登る道筋の途中で。

彼らは鉢合わせることになった。

「あなたたち、毎日毎日、どこをほつつき歩いているのかと思ったら、こんなところにいたのね」

出会い頭に早速嫌味をぶつけるのは凜だった。

「小学生姿の私にそっくりな子にウロウロされると迷惑だからやめてほしいと何度言ったらわかるのよ」

不機嫌に、リンとアーチャーのペアに向かって言い放つ。

「はいはい。その文句はこの間も聞いたばかりよ。それよりも、お山なんかは何の用？」

「っ、それと同じ質問を私もしたいのだけれど」

小学生姿のリンと高校生の姿の凜が口喧嘩する姿はどこか滑稽である。なにしろ、どちらも同じ『遠坂凜』なのだから。

ただ、片方が愉快型魔術礼装に乗せられて並行次元への転移などという魔法の事象を体験しているということと、宝具で10年若返っているということを除けば、彼女は同一の個体であるといっても過言ではない。それこそ、双子以上に文字通り同じ人間なのだ。

「貴方たち二人が喧嘩するのは、鏡を見ながら独り言を言うのとさして変わりませんわね」

そんな二人のやり取りを容赦なく責め立てるのは、ルヴィアである。

「まあ、私と違ってうつかりすぎている貴方がたですもの。自身で互いに注意なさっている分には丁度良いのかもしれないわね」
口元に手を当て逆の手は腰に置き、高笑いをあげるお嬢様。

「くっ、ルヴィア。少なくとも、私はルビーに振り回されて並行次元に飛ばされたりしていないわよ」

凜が反論を試みるが。

「どちらにしても。そんなうつかりをやらかしたのは、『トオサカリン』に違いありませんもの」

この件に関しては『遠坂凜』であるかぎり、勝目はない。

「それにしても、あれから二週間もたってるのに……」
「相変わらずです」

年少組の、イリヤと美遊が呆れて年長組の口喧嘩を見守る。とりあえず、現在のところは直接手や魔術が出るところにまで及んでい

ないぶん、まだマシである。

もつとも、このぶんだといつまた魔術大戦が勃発することになるか知れないが。

「君らも地脈の乱れを調査しにきたのかね」

アーチャーが、剣呑な雰囲気できり合っている自らのマスターに構わず、年少組の二人に声をかける。

「えっと……」

イリヤは思わず口ごもる。

一応、凜とルヴィアから説明を受けてきたが、龍穴だとか、地脈だとかの専門用語が多すぎて理解しきるには至らなかった。とりあえず、溜まった力を流すために穴を開けるから魔力を指定の場所に向けて撃てばいいというのだけはわかったというレベルに彼女の理解は留まっている。

「調査ではなく対処です。現状問題となっているのは、虚数域への穿孔は自然回復して閉じたのですが、地脈の流れは乱れたままになっています。これの原因としては龍穴が狭窄もしくは閉塞していると考えられます。なので、龍穴から高圧縮の魔力をながして地脈を拡張する予定です」

上手く説明できずに頭を抱えるイリヤの横で、美遊が理路整然と自分たちがここに来た目的を説明する。

「そうか、ならば丁度よかったな」

「丁度よかったとは？」

先を争うようにしてずんずんと早足で山奥へと向い歩き始めた年長組の後ろについて行きながらアーチャーに問いかける美遊。

「我々も、龍穴の異常に気がついたのでね。念のためセカンドオーナーに報告しようとしていたところだったのだよ」

「セカンドオーナー？」

聞いたことのない単語が混じっていたため、イリヤがその言葉をそのまま反芻する。

「ん？ そうだな、この冬木という霊地を管理している魔術師という意味だ」

アーチャーがその疑問に答える。

「その魔術師が、凜さんってこと？」

凜がそんなすごい肩書きを持っている魔術師だとは知らなかった。イリヤはもうずいぶん先に進んでしまった凜を見る。色々と騒動に巻き込まれはしたが、それでも彼女たちは卓越した魔術師なのだ。

「ああ、リン。その先は気を付けたまえ」

唐突にアーチャーが先を歩いている自らのマスターに声をかける。

「は？ 何よ、アーチャー」

今いいところなんだから、邪魔しないで。もう少しでルヴィアを

追い詰められるのよ。そんな無言の言い分が聞こえてくるような声音だった。

そのリンの姿が、唐突に掻き消えた。もちろん、一緒に並んで歩いてきた凜やルヴィアも一緒に。

「その辺りには、沼があつて足を取られやすいんだが……すでに遅かったようだな」

冷静に状況を判断し、息を吐き出すアーチャー。その視線の先で。

にぎや————！！！！

致死性のとらつぶ————！！

沈む沈む————！！！！

とても乙女とは思えない悲鳴を上げる三人が底なし沼の中で必死になつてもがいていた。

細い洞窟を通り抜け、辿り着いたのは自然に造られたモノとは思えないほど高い天井を有する大空洞。

ここに入った数人の少年少女のうち3人だけが泥だらけになつていたり、せつかくセットした髪がドロドロのぐちゃぐちゃになつていたりするのは愛嬌というものである。

「ひどい目にあつたわ」

「それもこれもアーチャーのせいよ」
「全くですわ」

それまで、いがみ合っていたとは思えないほど息もぴったりにアーチャーを睨みつける三人。

「やれやれ。君らは、自身のミスさえも人に転嫁するほど狭量なのかね？」

だがアーチャーの方はさして堪える様子はなく、逆に皮肉で返す。

「危険があるのを承知で、それを忠告もしない薄情サーヴァントに言われたくないわよ」

アーチャーのマスターであるリンが唇を尖らせる。

「というかだな。君はここに来る途中で、あそこに沼地があったのを認識していたはずだぞ」

「それは、それ。これは、これよ」

なんとも無茶苦茶なことを言っただけのけるマスターにアーチャーは言葉もなく頭を抱える。

「あらあら、アーチャーもそんなマスターじゃ色々と大変でしょう？
？ なんてしたら、私がマスターになって差し上げてもよろしくですよ」

そんなマスターとサーヴァントのやりとりに口を挟むのは、ルヴィア。キレイにセットされていた髪が、泥にまみれているというのにもかかわらず、優雅な仕草で髪をかきあげ婉然と微笑みかける様

子を見る者の目を引きつけて止まない輝きを持っている。

「ちょっと、どさくさにまぎれて何言い出すのよ、ルヴィア。だいたいあんたもさっきまでアーチャーを責めてたじゃない!」

「それは、それ。これは、これですわ」

なんとも無茶苦茶なことを言つてのけるお嬢様と、それに噛みつくマスターに挟まれアーチャーは肩をすくめる。この二人の口喧嘩に介入しても何の益もないことは十二分に承知しているから、傍観者に徹していた。

「はいはい。おしゃべりはそれでお終い。ちゃっちゃと終わらせて、帰りましょう」

凜が手を叩いて場の空気を変える。

「そっちの二人は、変身して準備ね。私たちは陣を敷くわ。で、」

テキパキと指示を出していた凜の言葉が、リンたちの所で止まる。

「私たちは、少し離れた場所で不測の事態に対処するわ」

要約すると、自分たちは手を出さないから、好きにやってちょうだいということになる。

「あっそ、別にそれで構わないわよ」

あっさりと答える凜。おそらくは、そう言ってくるだろうなということを予測していたし、この程度のことでは彼女たちに借りを作るまでもないとも考えていた。

「さ〜と。やっと、出番がきましたよ。ルビーちゃん、存在そのものを忘れられているのかと思って、ちょっとドキドキでした。ふふふふ、第二期初の変身シーン。これは気合を入れていかなければなりませんね」

イリヤのカレイドステッキが待ちに待った出番で、絶好調でハイテンションな声をあげる。

ちなみに、もう一つの方のルビーは未だに布で縛られ袋詰めにしたままなので、悔しそうなうめき声に似た何かを上げているが、あまり気にかかれていない。

「さあ、サファイアちゃん、行きますよ!!!」

「はい、姉さん」

こちらの世界の二本のカレイドステッキが呼応しあう。

『Der Spiegelform wird fertigm
um Transport (鏡像転送準備完了) ! Offn
ung des Kaleidoscops gatter (万
華鏡回路開放) !』

二本のステッキから滑らかに紡がれる呪文詠唱は神秘的な響きを持って響きわたる。

煌めく光が二人の少女を包む。イリヤは淡いピンク色の、美優は清らかな青い色の光。光は、それまで二人が纏っていた衣装をほどくように消し去り、その下から新しい衣装を形作る。

弾け散る光のカケラが、羽根のようにふわりと落ちて消えていく。そんな幻想的な光景が終わった後に、二人の少女たちがまさしく魔

法少女の出で立ちをしていた。

イリヤは小鳥をモチーフにした、可愛らしいフォルム。
美遊は蝶をイメージした、涼やかな装い。

「あれ、衣装変わったね」

イリヤが、変身後の自分たちの姿を見て少し驚く。

「はい〜、第二期ですから」

「~~~~~!!!!!!」

「!!!!!!」

ルビーの返答に、最も反応したのが布に包まれているルビーである。

モガモガと懸命にもがきながら、ぴよこんぴよこんと奇っ怪な動きで飛び回りリンに詰め寄っている。

「却下。変身しないわよ、あんな恥ずかしい格好に誰がなるかっての」

「恥ずかしい、」

「格好……」

すでに変身させられた魔法少女二人が互いに顔を見合わせてしま
う。

「なんていうか、もう慣れちゃったよ」

「な……慣れてはいませんが。でも、これもお仕事ですから」

もつどつしようもないという現状である。

「轉身、終わったみたいね。こっちも準備完了よ」

両手を腰に当てた凜が、魔法少女たちに声をかける。

彼女の背後では、鉾石で造られた葉のない大樹が場の中央に突き立てられ、その周りの地面に複雑にして精緻な魔術式が構築されている。

「式には問題ないわね。ま、こんなことで失敗するわけもないでしょうけれど」

リンが、凜たちの作った魔術式を検分して呟く。本来なら、その精緻さや緻密さは、見事と褒められるべきもののだが。彼女にしてみれば、褒めるほどのことでもないようだ。

「さ、始めましょう。私たちは、式の維持に努めますから、貴方たちはあの『地札針』に向かって魔力を最大出力で注入すればいいですわ」

ルヴィアが地面に突き立てた鉾石の大樹を指さし、年少組に簡単に何をすればいいのかを説明する。

「つまり、思いっきりぶっぱなせてことですよ？」

身も蓋もないイリヤの解釈。

「そうですね、イリヤさん。やっぱり、魔法少女は常に全力全開でなくては」

そのイリヤに間違った魔法少女観を植え付けようとするのは、言うまでもなくカレイドルビーである。

「めざせ、オーバーキル。殺っちゃったもん勝ちです」

「……………それ、おかしいよね、絶対」

「何言ってるんですか、魔法少女は見た目が10割。画面映えるような必殺技を駆使し、デストロツていなくて、なんぼのもんです」

ツッコミを入れたイリヤにも、の凄い勢いで反論するルビー。だが、その言葉にはどこにも根拠はない。

「え？ え？ そういうものなの？」

けれどルビーのあまりの自信たっぷりな様子と押し強さにたじろぐイリヤ。

「はい、そこ。いたいけな少女に壊れた幻想を押し付けないように。イリヤも、ルビーの戯言をそのまま鵜呑みにしないように。ほら、いいから杖を構えなさい」

凜の言葉がルビーをおし止めたことでわけの分からぬ攻勢がおさままり、イリヤは安堵の息をつく。とはいえ、ルビーが小さく舌打ちをしているところからするとイリヤを『ルビー]にとっての理想の魔法少女』に仕立てるべく、隙を見て何かを仕掛けるつもりのようなので、簡単に気を抜く事はできない。

「始めよう、イリヤ」

「あ、うん、そうだね」

イリヤは声をかけてくれた美遊に答えて頷き、二人は地礼針を挟んで対面する。

「魔力充填開始！」

ルヴィアの声に合わせて、二人の魔法少女が魔力を地礼針に向けて放つ。

「出力そのまま」

「充填率、20……40……」

二人の魔術師が、魔術を構築する。普通なら二人で執り行うような儀式ではない。難易度は高く、どちらかが先走りすぎてもあるいは慎重になり過ぎても失敗する代物。それを彼女たちは思わず見惚れるほど完璧にこなしている。

「こういう時は、息が合っているな」

そんな二人を観察したアーチャーが口にした言葉に、隣のリンが苦い物でも口に含んだように顔をしかめる。

「ほんと性格悪いわね、アーチャー」

凜とルヴィアが犬猿の仲というのは、別の並行次元でも変わらない。そのルヴィアとまるで仲が良いように言われていい気分になるはずもないリン。

「そういう意味で言ったわけではないのだが」

アーチャーは単に見たままを口にしたただだと主張する。

「そういう意味でとられることをわかって言うあたりが性格悪いって言ってるのよ」

リンの指摘をアーチャーは否定せず、肩をすくめた。

そんな完全に観客に徹している二人の向こうで儀式は淀みなく進み、地面に突き立てられた地札針に十分な魔力が蓄積される。あとは、タイミングをはかりその膨大な魔力を開放させるだけ。

「Offnung（開放）！！」

二人の魔術師の高らかな声が、大空洞に響きわたる。

瞬間

蓄えられた魔力の全てが、地札針の根元から龍穴の中心に向けて一気に放出される。鮮やかな煌めきが空洞を満たして消えた。

「これで、終わり？」

あまりに呆気ない終結に、少し心配そうにイリヤが周囲を見回す。

「そ、これでおしまい。効果のほどは、また改めて測定しなければならぬけど、今日できるのはここまでよ」

凜がイリヤの疑問にはつきりと答える。

「早く帰りますわよ。こんなところに長居したくは……」

「ちょっと待ってっ！！！！」

ルヴィアの言葉にかぶせて、リンが切羽詰まった声をあげる。端から見ていた魔術師である彼女が、その違和感に一番最初に気がついた。

「おかしいわ」

「一体何がおかしいとおっしゃるのです？」

問い詰められてもうまく言葉にできずない。形容しようがない感触にリンが胸を抑える。

「っ、来る！！」

リンの叫びとほぼ同時に。

逆流してきた魔力が大空洞の天井部に激突した。高濃度に圧縮されてきた魔力の塊が、天井の壁を突き崩したことで、大小さまざまな大きさの石が雨霰と降り注ぐ。

「伏せる！！」

アーチャーがリンを庇い、投影した剣で降り注ぐ岩を払いのける。だが、凜たちから距離が離れすぎているため、彼女らを助けに行くことはできない。

少女たちは、各々で頭上へと落ちてくる岩に対処している。その中で、異質な動きをしているのがイリヤだった。

上から降ってくる岩に構わず、迷うことなく凜のもとへと走りよ
り手を伸ばす。

「クラスカード『アーチャー』！ インストール 無限召喚 ！！！」

彼女が引き寄せたのは、まさしく奇跡の力。

クラスカードという、正体不明の魔術アイテムを鍵として別の平
行世界で呼び寄せられた英雄の力をその身に降す。

少女の姿が一瞬にして替わる。彼女を包んでいた桃色の衣装が解
けるようにして消え去り、赤い外套が現れる。

細部は微妙に異なるが、それは明らかにアーチャーだった。

「ロー・アイアス 熾天覆う七つの円環」

イリヤは右手を掲げ高らかに防具を呼ぶ。

それは、アーチャーが最も得意とする防御用装備。七つの花卉が
花開き天井から落ちてくる岩石を防いでいたが、楯の存在が急に揺
らぐ。

そして

天井の崩壊が終わった。

全員が、起き上がり何が起こったのかを確認するために周囲を見
回して、一瞬思考が停止した。

人数が一人増えているのだ。

それは。

白銀の長い髪に、褐色の肌、淡い朱金の瞳、小柄で華奢な体格の少女。マントのように広がる赤い外套に、防御性能を全く考えられていない小悪魔のような黒い革鎧。

色々と違いはあるが、少女は色違いのイリヤスフィールだった。

第二話 宣言は、小さな魔女の決意

「「え……………?」」

イリヤたちは互いに何が起きているのか全くわからない様子でお互いを見つめている。

その場の全員が、呆然とイリヤたちを見つめている。この現実を受け入れるために脳の機能をフル活動させた結果生じた空白。

その間に、黒いイリヤはウサギのように飛び跳ねて外へ向かって逃げ出して行った。

「アーチャー!! 追って!」

すぐさまリンが、自身のサーヴァントに指示を出す。

アーチャーはその命を受け、逃げ出したイリヤを追いかけるために霊体化した。

「……………一体、何が起きているのです?」

呆気に取られたまま、ルヴィアが誰にともなくつぶやいた問いかけ。それは、ここにいる全員が抱いている疑問でもある。

「アレのことは、今はアーチャーに任せておいて、私たちはさっさとここを出しましょう」

すっかり土埃にまみれてしまった身体を払いつつ、リンは立ち上がる。

「何か、知っているの?」

落ち着きはらっている様子のリンに凜が視線を向ける。ルヴィアも同じくリンを見ている。

「まさか」

そんな二人の視線を受け流して、リンは先に立ち出口に向かう。

「イリヤ……」

未だ呆然としたままのイリヤを心配して美遊が声をかける。

「え? あ、美遊」

声をかけられたことでようやく我に返ったイリヤ。

「大丈夫?」

言葉数は少ないが、美遊は心からイリヤを心配していた。

「うん、とりあえずどこにも以上はないけど……あれ、何だったんだろう?」

しきりに首をかしげるが答えは出てきそうもない。

「とりあえず、出よう」

美遊がさしのべた手をイリヤが取って立ち上がる。

「うん、あつ美遊はケガしなかった？」

「大丈夫。ありがとう」

以前はほとんど表情を変えることがなかった少女が、柔らかく微笑んでイリヤに答える。

それがイリヤには嬉しくて、笑顔を返した。

「まったく。大変なことになっているってのに、あつちは呑気ね」

イリヤの様子を見ながら凜が呟く。たしかに、イリヤには今のところ特に大きな問題は生じていないようだ。

そつと気がつかれないよう、服の上からポケットの中身を確認する。先ほどの落盤の最中にイリヤが触れた方のポケットには、『アーチャー』のクラスカードが入っていた。

それが、消えている。

一体、どうということなのか。

今考えても答えが出ることはないが、それでも思考を止めることはできないでいた。

背中に向かってきているのは、赤い外套を身にまとったサーヴァント。

あれは本物の『アーチャー』
それを彼女は『知っている』

いつでも追いつくことが出来るというのに、あえて一定の距離を保ってピタリとついてきているのは何故なのか。

少女は一体何が起きているのか未だ把握しきれていない。だからせめて、少しでも落ち着いて考えられる時間と場所が今は欲しいだけ。なのに、この追い駆けっこを続けられていては、それさえも満足にすることができない。

まるで、我慢比べのような状況の中で、必死になって鬱蒼としげる木々の合間を駆け抜ける。少しでも、木の影や岩の影になり相手を振り切ろうと必死になって走り続ける。

だが、そんな悪あがきなど追手にとってはまるで無意味。

振り返り、相手の様子を確認する。相手はつまらなさそうでもないし、まして楽しんでいることもない。息が切れる様子もなく機械のように、ただ目的を達成しようとしているようにしか見えなかった。

「ああ、もうっ！…！」

先に我慢が出来なくなつたのは少女の方だ。彼女はその手に白と黒の双剣を投影した。この投影が普通の魔術からみれば異質なものでありながら、それができると少女は『知っていた』

陽剣干将を投げる。干将は曲線を描きながら、アーチャーへと迫る。だが、アーチャーは焦るでもなく、彼女が投擲した干将を見てから陰剣莫耶を投影。彼が投影した莫耶に惹かれるようにして、干将の軌道が変わりそれを危なげなく受け止めた。

「ふむ……」

アーチャーは受け止めた干将をチラリと解析する。間違いなく投影で造られたものだ。しかも、『英霊エミヤ』の投影と同じく魔力で造られた物でありながら、『実』がある。

普通の魔術師が行う投影から見れば、十分に異常なレベル。だが、アーチャーから見れば

「脆いな」

パキンと、乾いた音を立て干将は砕け散る。まるで、アーチャーの眼に晒されることに耐えきれなかったとも言つように、あっさり現実から消え去っていく。

「な!？」

自分の投影した武器がこうも簡単に砕け散つたのを見て、黒い少女は少なからず驚く。『アーチャー』のクラスカードを核にして産まれたからこそ、彼が何をしたのか理解できる。

彼は投影を重ねがけして存在を上書きしたのだ。だが、贗作として生み出されたものは上書きされた現実に耐えきれずに崩壊した。

「性格、悪っ！」

顔をしかめて吐き捨てる少女。

アーチャーならば、他にいくらでも投影された剣を始末する方法があるだろう。だが、その中でもあえてあの方法を選択したのは、自分のほうが投影の力は上なのだと見せつけるため。

「失礼だな、君は」

その声は、予想以上に近くで聞こえた。

「え？」

惚けた声をあげた少女は何が起こったのか理解する暇すら与えず、気がつけば地面に組み敷かれていた。左の腕をネジ上げられ身動きが全く取れない状況で、倒されている。

それでも、ギリギリと首を曲げてなんとか背中を押さえつけているアーチャーを見る。

「あんた、一体何者なのよ!？」

朱金の瞳に涙を溜めながらも、少女はアーチャーへ咬みつくように問い詰めた。

「この状況で質問するとは、なかなか気丈だな」

すでに勝負はついた。これで、少女の命運は尽きることになる。それでもなお、少女はアーチャーを睨みつける。いや、命運が尽きたからこそその眼差しか。

「はぐらかさないで。こんな異常な投影を使う奴なんて、聞いたことないわよ!」

これで終わりならば、せめて自分を倒したモノの正体を知ってから消えたい。そんな思いから、少女は問いを発する。

「ふむ……どうやら、クラスカードから入手できた情報は私の能力だけのようだな」

正確には情報だけではなく能力そのものも取得しているかと、自分の言葉に自分で訂正を入れ、なにやら納得顔で頷いている。

その余裕な態度が、また腹立たしい。

「ああ、そう。自分の正体を話すつもりはないわけ。そうよね、こっちは負けたんだもの。イリヤたちの前に引きずり出すんでしょ？ それとも、今ここで私を消す？」

「ふむ。ここで消してしまうという手もあったか」

まるで、言われたから思いついたとでも言うようにアーチャーはつぶやいて、莫耶を取り上げる。

瞬間、黒い少女の全身の筋肉が恐怖で収縮した。硬く目を閉じ、小さくなって震える。

だが、覚悟させられたというのにそのときは一向に訪れる気配はない。

そろそろと、目を開けると。アーチャーは声も出さずに笑っていた。

「か……からかった？」

笑われた。その事実だけで、全身が朱に染まる。

「いや。すまなかった」

言つて、アーチャーは少女から手を離す。

少女は、即座に立ち上がって跳びのきアーチャーから距離を取つた。

「私を逃すつていうの？」

アーチャーが何を考えているのか掴めない。だから少女は、訝しげにアーチャーを見る。

「逃すも何も。私がマスターから受けた命令は君を追いかける、と
いうだけだからね」

腰に手を当て黒い少女を真正面から見つめるアーチャー。彼から何かを仕掛けてくる様子もない。

「ここで私を逃したら、そのマスターに怒られるんじゃないの？」
「私のことを心配してくれるとは優しいんだな」

アーチャーは少しばかり驚いたという表情をしてみせる。本気で
そう思っているのか、それとも冗談で言っているのか判別しにくい
声と表情。

「ふざけないで！」

少女はアーチャーの言葉を虚言と取った。だから、身構えその手に魔力を凝らせる。

「おや、先ほどの続きをやるかね？ 私は構わんが、君はそれでいいのか？」

それに対し、アーチャーは組んでいた両腕を解いて無造作に脇に下げ剣を構える事もなく、言葉を続ける。

「今の状態でこれ以上続けるのは、厳しいと思うが？」

何もかもを見透かすような、灰白色の瞳が少女を射抜く。

「くっ……」

小さく呻き、アーチャーの言葉を肯定することも否定することもできない。

そしてそれ以上何も言わずそのまま踵を返して、木々の頭上へと飛び上がり姿を消した。

「さて、これでいいかね」

アーチャーは誰もいなくなったというのに、まるで誰かが聞いているかのように語りかける。

ええ、構わないわ。戻って、アーチャー！。

答えは、ラインを通じた念話によって返された。

その答えを受けて、アーチャーもまたその場所から姿をかき消し、山には再びいつもの静寂が落ちた。

遠坂邸の居間には現在、目に見えない冷たい嵐が吹き荒れている。その発生源はこの屋敷の主にして現遠坂当主、遠坂凜によるものだ。彼女は、目の前の二人の並行次元移動組を睨みつける。

「そんな説明で納得しろと」

凜が、全く納得できないという顔でアーチャーを責める。

「まあ、納得できんだろうな」

当のアーチャーはあっさりとそれを認める。

「そうよね、納得させられるとは思わけないわよね。『追いかけるって言われたから、追いかけただけです』なんて、どこの犬よ。いえ、犬のほうはまだマシな仕事をするわね」

容赦のない言葉で次々とアーチャーを攻撃する。

「やれやれ。だが、あの時点では私に彼女と対立する意味がなかったのよね」

だがアーチャーはそんな皮肉にも全く堪える様子はない、

「な？ ちょっと、あなたのサーヴァントがあんなこと言ってるけど、あれでいいの？」

これ以上彼を責めても意味がないと判断し、矛先をアーチャーのマスターであるリンへと向ける。

「別にいいんじゃない」

だが、こちらと同じような態度だった。

「少し泳がせて彼女が何を考えているのかを探るのは決して悪手じゃないわ。あの時点で、彼女を下手に追い詰めるべきじゃないとアーチャーが判断したなら、それでいいと思う」

まるで見てきたように話すのは、リンがラインを通じてアーチャーからその時の状況を詳しく聞いていたからだ。

「ああ、つまりはそういうこと」

凜は不満気に小さく鼻を鳴らす。

「いつものように、あなたたちはこの件に関しては切羽詰るまで傍観を決め込むってことね」

嫌味を言っただけ。どうせ、「お言葉に甘えて、そうさせてもらおうかしら」とか「そうね。私たちには関係ないもの」とか言いつつ、手出しするつもりがないことを意思表示してくるだろう。

「それは、素敵な提案ね。そうできたら、どれほどよかったか」

だが、返ってきたのは言葉は予想から少し外れたものだった。

「嫌だけど、仕方ないから協力する。みたいな言い方ね」

「はいは〜い。それについては、ルビーちゃんが説明します」

両端の白い羽をパタパタとせわしなく動かして、飛び出してきたのは傍迷惑しかぶりまかない愛と正義の愉快型魔術礼装、携帯バージョン。

「出たっ！」

どこからともなく現れたルビーを見た瞬間、心底嫌そうに顔をしかめる凜。

「あらま、かわいくないですね凜さん。そんなだから、魔法少女になれないんですよ？」

「あなたに言われたくない！ ていうか、魔法少女になんてならなくてもいいわよ！！！」

「んもう、すねちゃって。本当は、羨ましくせに」

「んなあああ！！ すり寄って来るな！ この、アホ杖！！ もういい！！ これは、この世から抹消すべきなんだわ！！！」

この杖のしゃべる一言一言が、凜の逆鱗を思いつきり逆なでしてくる。それは優雅とか、余裕とか、そういった遠坂凜を構成する上で重要な要素を吹っ飛ばしてくれるほどのものだ。

ふよふよとお気楽に浮いているルビーを捕獲するべく手を伸ばすが、それはスルリと華麗にかわされてしまう。

「ふっ、毎度毎度、そう簡単に捕まると思いましたか？ その動きは、すでに見切っています」

アチヨーと、なぜか中華風の掛け声と共にルビーチップが凧の脳天に向かって振り下ろされる。直撃する寸前に、それを見事に躲してみせる凧。

「いいわよ、ルビー。あんたがそのつもりなら、こっちにだって考えがあるんだから」

地獄の底から響いてくるような低い声が、凧の口から吐き出されている。どこからどう見ても悪役のセリフである。

「よろしいでしょう、凧さん。その覚悟、受け止めてみせます」

可愛らしい声で、まるで正義の味方のように応じるルビー。

「止めないのかね？」

そんな、人としての尊厳とか意地といった大事なものをかなぐり捨てた戦いが今にも勃発しそうな空気の中、アーチャーがぼそりと隣のリンに声をかける。

「そっちこそ、止める気はないの？」

リンが問い返す。

「……………」
「……………」

長い沈黙が二人の間に落ちた。その間にも、向こう側ではルビーが凧をからかって遊んでいる。

「こおのっ！！ やめろって言ってるでしょうが、バカ杖がああ
あ！！！」

「イヤよイヤよも好きのうち、っていい格言ですよな」

「それ、格言じゃないし！ って、背中っ！！ 背中に入ってくる
な！！！」

「んんん、弱いのはここですか？ それとも、こつち？」

「にぎや~~~~っ！！！！！！！」

凜の断末魔の悲鳴があがる。

正直言つて、この二人の争いに手も口も出したくはない。下手をすれば、この戦いに巻き込まれ、一緒になって混沌へと落ちてしま
う可能性もある。何より、リンもアーチャーもそれぞれに、この手
の争いごとに対してトラウマがある。

マスコットにされたり、魔法少女にされたり、別世界に送り込ま
れたり……………

だが、いつまでもこの戦いを放置していいわけがない。むしろ百
害あつて一利なし。だから、アーチャーは息を一つ吐き出したあと、
仕方なしに声をかけることにした。

「いい加減にしたほうがいいと思うが、どうかねルビー？」

声をかけられ、ぴよこんと飛び出してきたルビーが上機嫌で宙を
クルクルと舞う。

「あら？ もしかして、アーチャーさんも遊びたかつたんですか？
こつちの凜さんもついでだからカレイドルビーに変身させちゃい
ます？ もう、そういう趣味があるなんて、ルビーちゃん知りませ
んでした」

ノリノリのルビーの音が、止まった。
それまで飛び回っていたルビーをアーチャーが事も無げに捕まえた瞬間に。

「私としても、できればやりたくないのだが。君のような口クでもない精霊を封じる手段というのも幾つかある。いや、本当に、やりたくはないのだよ。だが、何時までも君に主導権を握らせておくと、どうも上手くないようなのでね」

ルビーを掴んでいるのとは逆の手にシュルリと滑らかな音を立てて投影されるのは、赤い聖骸布。現在、アーチャーが身につけている外套と同じ材質のものだ。

「これは、外界に対して護りの効果がある。つまり 言っている意味がわかるかね」

外界からの刺激を遮断するということは、逆に言えば外界からの接触を絶たれるということだ。

「あゝわかりました。今回は、アーチャーさんの顔を立ててここで引きます。だからその聖骸布、しまってもらえませんか？」

アーチャーはしばしルビーを見つめたあと、聖骸布を消す。

「全く。これ以上面倒ごとをふやさんでくれ」

思わずといった様子でポツリと漏らしたアーチャー。

「……助かったわアーチャー。それは、それとして。あなたの趣味

ってどういうものなのかしら？」

ひきつった笑顔を浮かべてアーチャーに迫る凜。

「変な勘違いをするな」

迫る凜の額をアーチャーは人さし指で押しのける。

「全く、話一つ進めるだけでこの有様とは」

肩をすくめて呆れ返る。

「うっさいわね。ルビーはそっちのモノでしょ。ちゃんと管理しなさいよ。なんなら、さっきのアレで一生、グルグル巻きにしておけばいいのよ」

アーチャーの腕を掴み、噛み付かんばかりの様子だ。

そんな凜に皮肉の一つでも返すのかと思いきや、リンたちはその言葉で彼女から目を逸らす。まるで、それをやったせいで面倒なことになったとでも言いたげな表情。

「な、何よ……」

何があったのか、あまり聞きたくはないが聞かなければ始まらない。

「さっきまで、アイツを縛って無理やり黙らせておいたでしょ」

リンとしても、こんなことを話したくないのだが、それでも話さ

なければ始まらない。

「さつき……ああ、あの大空洞の中でのことね」

白い布でぎつちりと縛り付けられていたおかげで、リンたちが所有しているルビーが静かだったことを思い出す。

「ええ、先程まで私、無理やり黙らされておりました。そのおかげで、ねえ？」

飛び上がったルビーが、嫌みったらしくリンの肩を突く。

「ぐっ……」

反論もできないリンは悔しそうに唇を噛む。ルビーが説明できない状況に置いておいたのはリン自身なのだ。

「ぶつちやけますと、アレはサーヴァントに非常に近い存在なんです。だから、」

「だから、彼女のことを少し調べる必要があるのよ。元の世界に帰るために」

ルビーの台詞の途中から、リンが言葉をかぶせる。

「……もしかして、あなたたちあの黒いイリヤの正体をつかんでいるんじゃない？」

そんなあからさまに不自然な様子のリンに凜が、鋭い視線を向ける。

「まさか。私たちにわかっているのは、ルビーが言ったようにアレがカードから造られたサーヴァントに似ている存在だということだけよ」

「あ、ちなみに根拠の半分は私の乙女の直感です。残る半分は、アーチャーさんのご意見ですけど」

アーチャーへ確かめるように凜が視線を向ける。

「サーヴァントには同じサーヴァントの気配を感じとることができない能力が備わっている」

アーチャーは両腕を組んだまま器用に肩をすくめ、愛想も素っ気もなく答える。

「……………わかったわ」

しばし黙考したあと、凜はそれ以上の追及しないことにした。

「今あなたたちから聞いた話は、ルヴィアにも伝えることになっているけど、これ以上は聞かないでおく」

凜は、彼らが無かを隠していることを知りつつ今はそれ以上話さなくてもいいとした。彼らが話さないと決めたことは、状況に变化がない限り話してくれないだろう。それは先だつてのクラスカードの騒動の時からの一貫した態度だ。

「そうしてくれると助かるわ。さて、アーチャー、そろそろ休みましょ」

リンは立ち上がり、居間の出口に向かう。アーチャーもそれに付

き従い、廊下へと出た。

「……リンさん、よろしいのですか？」

階段に上がる途中で、声をひそめてルビーが問いかける。

「よろしいのかって……アレが、魔力によって作られている仮初の存在だってことを話さなかったこと？」

そんなことは、凜も気がついていいるだろう。クラスカードによって生み出されたサーヴァントに近い存在だと明かした時点で、そこまでの考察は可能だ。

「それとも……」

そこで一旦言葉を切り、リンは氷のように冷たい瞳でルビーを見る。

「私たちがアレを消すつもりだという話をしなかったこと？」

口元に冷笑さえ浮かべるリンはまさしく小さな魔女だった。

「……そうです。話せば協力してもらえるかもしれませんが」

ルビーは何時になく真面目な声音で、凜に協力を要請するように促す。

「アレをクラスカードに戻す際に生じるエネルギーは元の世界に戻るために必要なエネルギーになる。だから、力を貸せって説明しろ」と

黒いイリヤをクラスカードに戻した所で、得られるエネルギーが極僅か。けれど、転移のために僅かに足りないエネルギーを満たすには十分。

そして凜に協力を願い出れば、アレをより容易く捕獲することが出来るだろう。

けれど

「却下よ。この程度のことば、私がやればいい。わざわざ、他人の手を煩わせるつもりはないわ」

「……リン」

後ろから、アーチャーは声をかける。

「何よ、アーチャー文句あるの?」

振り返る。階下にいるアーチャーをリンが見下ろす形になる。

「文句はない。だが、キミが責を負う必要もない。私がやればすむことだ」

そのために、自分はここにいるのだと、アーチャーは事も無げに続ける。

「ええ、そうね、アーチャー」

細く長い息を静かに吐き出しながら、リンは応える。

「そうだったわ」

「その言い方だと、まるで私がいるのを忘れていたように聞こえるのだが？」

両腕を組み、少しムツとした様子でリンを見上げる。

その子どもっぽい仕草がおかしくて、リンは小さく笑った。

「そうしていると、本当に18歳くらいの少年に見えるわね」

「リン」

アーチャーはほんの少し諷める響きを込めてマスターの名を呼ぶ。

「わかってる。大丈夫よ」

表情を引き締めて答える。

「次に、アレを見つけたら……消すわ」

それはリンの明確な宣言であり、彼女がそう決意したのならば、近い将来それは現実のものとなる事実だった。

第三話 現れたのは、四人目の魔法少女

黒いイリヤ出現騒動があった翌日。

いつものように遠坂凜は登校し、いつものように学校で授業を受けていた。

その放課後。

靴箱の中に入っていた、一通の手紙から事は始まる。

そこには、丁寧な文字で弓道場裏手の雑木林に来て欲しいと記されていた。しかし、宛名はどこにもない。

凜には時々、こうした手紙が靴箱や机のなかに挿しこまれることがあった。

大抵は異性からの告白、あるいは極稀に同性のやつかみ。

宛名のない手紙など無視してもいいのだが、ここ最近魔術関係のゴタゴタが続いているため、不用意に一般人を巻き込むようなことになっても問題だ。

だから、凜は取りあえずこの手紙に応じることにした。

告白ならば後腐れないようにお断りをし、やつかみならば二度と歯向かう気が起こらない程度に痛い目にあってもらえばいい。

そんな気楽なことを考えて訪れた弓道場裏手の人気のない雑木林。そこに入った途端、人払いの結界を敷かれ魔術弾による攻撃を受けたのだ。

「ちょっと、いきなり何なのよ！！！！」

唐突過ぎて、それ以外の言葉が凜には思いつかなかった。

薄曇りの空のせいで、夕方だというのに林の中は肌寒く生い茂る木々のせいで暗い影が落ちる。地面は整備されているはずもなく、

木の根が張り出し、折れた小枝などが落ちていているうえ、落ち葉が降り積もっているため走りにくいことこの上ない。そんな中を、全力疾走しなければならぬ。

背後からの雨あられのような魔力弾の攻撃は果てる気配もなく続く。

今も、魔力弾が耳のそばを掠め前方の木に穴を穿った。

「いい加減、ちょこまかせず私の魔力弾の餌食となればよろしいかと」

雑木林全体を覆うほどの大規模な風の魔術を使い、声を反響させて出所を分かりにくくしているのだらう。敵かとさえいえる静かな声が林の中に響きわたる。それはまるで、教会で受ける説法のように耳に心地よい声音。

だというのに、その冷静な声とは裏腹に魔力弾に込められている威力や、先ほどの宣言などから怒り狂っている事が感じ取れる。

「あなたが、なんで愉快型魔術礼装を振り回しているのか知らないけど！　なぜ私に何の理由もなく攻撃してくるのよ！」

声の出所は、大方の予想はついていてもはっきりとわかるわけではない。だから、凜は彼女がいると思わしき方向に向かって声を張り上げる。

少なくとも、彼女から唐突に攻撃を受ける理由が思い当たらない。だから、まずなぜ攻撃を仕掛けてくるのかを問い質す。

「何の理由もなく……ですか……」

歯の隙間から零れるような声が返ってくる。

「他ならぬあなたがそれを言うのですね？　ご自分の薄っぺらな胸に聞いて確かめてみてはいかがですか？」

あえて人の身体的欠陥をつついてくる性格の悪さは、魔法少女になっても変わらない。

「うすっ……そう……あなた、それを言うからには、当然覚悟はできているってことよね？」

「覚悟をなさるのは、あなたです。遠坂凜」

雑木林の中、二人の魔力がどこまでも高まっていく。片方は、魔術礼装により無制限に魔力供給を受け、もう片方は宝石に膨大な魔力を溜め込み、それを一気に解放することができる。そんな彼女たちがぶつかり合えば、この一帯が焦土と化すのは必至。そんな絶大な威力を誇る魔術を互いに使うことができるため、彼女たちの勝敗は一瞬でつく。だからこそ二人ともお互いをつぶし合うこと以外は意識の外のことになっていた。

それゆえに、二人とも気がつくことができなかった。

「……そんなところで、何やってるんだ？」

呑気なことを言うてのける第三者の存在を。

「そんなところにいたら危ないだろ？」

袴を着て、矢を右手に持っている赤毛の少年が、可愛い衣装を身につけ不安定な木の枝の上に立っている少女を見上げる。

「……………衛宮士郎……………っ！」

内心はどうあれ表面上はそれまで感情をほとんど揺らさずにいた少女が、初めて動揺し士郎を見下ろす。

「そこねー！」

だから木陰から飛び出して来た凜が攻撃を仕掛けてきたときも反応できなかった。

凜が少女に向かって、ガンドをぶつ放す。黒い弾丸のような呪いは、彼女のすぐ脇を掠めた。咄嗟に回避行動を取るが、細い木の枝の上。当然のことながら、彼女はバランスを崩し、背中から地面に向かって墜落した。そのまま落下すれば怪我を負うのは必至。それを見事抱きとめたのは、木の脇に立っていた士郎だった。

「大丈夫か？」

落ちてきた少女の無事を確認する。

「ええ。助かりました。けれど、離れていてくださいますか？」

少女はゆつくりと首を凜の方へと向ける。少女が浮かべるのは、細い三日月のような酷薄な笑み。

「あの罪深き薄弱な胸をした彼女に洗礼した後、じつくりと魂の改悛をしなければならぬので」

杖頭に青いリボンのような飾りのついたステッキを凜へと突きつける。

凜の方は士郎に抱えられている少女を茫然と見ている。

「ええっと、どこから突っ込めばいいのか、迷うところというか。突っ込みどころしかないような気もしないでもないのだけれど……」

目の前の理解しがたい光景に凜は思わず頭を抱え込む。

士郎が抱えている、可愛らしいピンク色の衣裳を纏った少女。その衣装は、やけに派手でヒラヒラして、フワフワしている。白銀の髪に大きな赤いリボン、肩を大きく出し胸部を強調したデザイン。裾にレースが入って、フワリと大きく広がり大きな星の模様が入ったピンクのスカート。背中が大きくあいていて、艶やかな白銀の髪が揺れるたびに、白い肌が見え隠れする様は可愛らしいのにどこか扇情的。それは、一言で表現するならば魔法少女の装い。

そんな魔法少女をしているのは、穂群原学園の保健医である華憐^{カレン}。

しかし、その彼女が十歳前後の子供の姿をしている。

「……………前例があるし、人目もあるからその格好や容姿についての突っ込みはここでは我慢するわ」

突っ込みついでに声をあげて爆笑してやりたいのだが、その前例

が平行世界の『自分自身遠坂凜』となれば笑うに笑えない。

「とにかく、場所を変えましょう。一般人がいるような場所です話でも、やり合うことでもないでしょう」

「今さら、何を言っているのかしら？」

凜の提案にカレンが異を唱え、士郎の腕の中でステッキを振りかざす。

「そんなことを言って、逃げる算段をつけるつもり？」

「まさか。でも、関係ない人を巻き込むべきではないでしょう」

凜が、これ以上はここで話すことも戦う事もできないと言外に言うてのける。魔術に関係のない士郎のいる場所でこれ以上この話を進めれば、神秘の秘匿が守れなくなってしまうのだから。

「あら？ 衛宮士郎ならば、この姿と魔術礼装を見れば、ある程度何が起こったのか想像をつけられるではありませんか？」

そうですね、という確認の視線を向けられ、士郎は困惑する。

「ええっと、話が全く見えないんだが……そもそも、キミは？」

「まあ、わからなくても仕方ありませんね。これほどまでに単純にして明快な解答が目の前に与えられていたもわからないのが、貴方ですから」

「えっと……」

ようは鈍感だと言われたのだが、可愛らしい少女の口から吐き出された表現はどこまでも辛辣。そのあまりの落差に士郎は反論の声もなくだまり込んでしまう。

「あちらの、『あかいあくま』のせいで、こんな姿にさせられてしまったのです」

「待つて!!!!」

凜が制止の声を上げるが、完全無視を決め込むカレン。

「端的に言うのなら、ギルガメッシュの薬を飲まされ傍迷惑な魔術礼装を押し付けられたということです。なのに、自分には関係ない顔をするなんて、ほんと浅ましい……」

そこで一度言葉を切り、カレンの黄金色の瞳が冷ややかな光を浮かべ凜を見る。

「貴方は、以前にもコレとは別タイプの魔術礼装に迷惑を掛けられたとかいう話ですから、おおよそのことはわかるでしょう?」

これまで起こったことを簡潔に説明し終え、カレンは自分を抱いたままの士郎を見上げる。

「魔術……礼装?」

カレンは分かって当然という態度だが、士郎の方は全く何を言われているのか分かっていない。

「衛宮士郎？」

事ここに至って、ようやくカレンも士郎に話が全く通じていないことに違和感を抱く。

「だから言ってるでしょ、ソイツは一般人だって。魔術の魔の字も知らないのよ」

「衛宮士郎が？ 確かに彼の魔力は非常に少なくその魔術も一つを除いて有り得ないほどに未熟でしたが、それでも一応れっきとした魔術師……って、あら？」

落ち着いて士郎の魔力を感知して見ると、彼からは全く魔力を感じ取れないことに気がつく。

「だ・か・ら。さっきからそう言ってるでしょう。こいつは、魔術と無関係の人間だって」

「そんなわけないでしょう？ 現に、彼は聖杯戦争にマスターとして……」

「あのお」

「なに！？」「」

二人でヒソヒソと話しあっているところに、士郎が声を掛けたせいで、二人とも殺気立って同じタイミングで彼を見る。

「二人とも、魔術師だったんだな」

彼女たちの視線にたじろぎながらも、士郎は爆弾発言を投下する。

「「っ！！！！！」」

士郎の発言に、色々な意味で二人が固まる。

「俺、自分の身内以外の魔術師なんて知らなかったから、ちょっと驚いたけど……」

そんな二人の少女の驚愕にどこまで気が付いているのか、連続して爆弾を投下する士郎。

「な！？ イリヤのこと、気が付いていたの！？」

まさか、イリヤがカレイドステッキのマスターであることに彼が気が付いていると思ってもみなかったと凜が声を上げる。

「え？ イリヤは魔術師じゃないだろ」

だが、イリヤが魔術に関係していると知らない士郎の方が今度は首をかしげることになる。

「「「……………」」」

齟齬がありすぎて、話が噛みあわず三人とも押し黙ってしまった。

「ええっと。取りあえず、こんなところで話をするのもなんだし、俺の部活ももうすぐ終わるから、別な場所で落ち着いて話そうか」

「そっいえば衛宮士郎、貴方どうしてここにいるんですか？」

この雑木林は彼女が杖の力を借りて人払いの結界を敷き、中に侵入する気が起こらないようにしている。例え、封印指定クラスの魔術師だつて林の中に入り込ませない自信が彼女にはある。だからこそ、なぜ士郎がこの林の中にいるのかが不思議でならない。

「どうしてって……後輩が矢をこの辺に誤って飛ばしたんだよ」

右手に持っている矢を見せる。

「で、これをしばらく探していたんだ。矢を紛失すると、色々問題だからさ」

「つまりは、結界を張る前から林にいた、というわけね」

思わず凜はカレンを見る。

「……………少々の手際があつたことは認めましょう」

しぶしぶながらも自身の非を認め神に許しをこうように両の手を胸の前で組むカレン。

人払いの結界は、所詮人払いの効果しかなく、すでに中に入っている人を追い出すような効果はない。ゆえにカレンが結界を張る以前に雑木林の中にいた士郎には意味がなかったということだ。

「こうなつてしまった以上は、しょうがない。私の家で、『お話し合い』しましょ」

遠坂凜が浮かべるのは、これ以上ないほどに綺麗な笑みなのだが。

「……………ちなみに、拒否権は？」

「……………拒否、するの衛宮くん？」

変わらない笑みのまま、見つめられ士郎は言葉もなくフルフルと首を横に振る。彼の本能が告げている。彼女に反論すれば殺されると。

「異論もないようだし、じっくりたつぷりと話し合いをしましょう。時間は有限ですもの、有効に使わなくては。ほら、カレン、あなたも変身を解いていくわよ」

二人に背中を向け、肩で風をきるようにして颯爽と歩き始める凜。

「衛宮士郎」

フルネームで呼ばれ士郎は自分の腕の中にいる小さいカレンを見下ろす。

「そろそろ下ろして頂けるとありがたいのですが？」

「へ？ なんでさ」

呑気な答えを返す士郎。

「下ろしてください」

カレンはニブイ士郎に少しイラつくがそれを表情には出さずに、同様の言葉を繰り返す。

「でも、あんな高いところから落ちたんだ、怪我をしていたら大変だし」

「怪我なんてしていません。ですから、下ろしてくださいと……」
「平気だよ。カレンは軽いし。それに、この林は結構歩きにくいから」

士郎から発せられる言葉には、悪気の欠片などなく。ただ、純粋に『子供』を心配してのもの。

その士郎の顎に衝撃が走った。

頭部が仰け反り、士郎の目の中に星がチカチカと瞬くほどだ。反動で身体が傾ぐ。カレンは、緩んだ士郎の腕から華麗に着地した。

「……心配してくれている相手に実力行使とは、容赦のないマスタ―ですね」

彼女の手の中のステッキが呆れる。カレンは、士郎の真下からステッキの柄でまっすぐに顎を突いたのだ。完全に不意をつかれた士郎が、かわすこともできず地面にうずくまって身悶えることになってもしかたがない。

「これから変身を解くのです。魔法少女が変身を解くときは人目につかないようにする。それが基本でしょう。ですから、これは当然の報いです」

まるで、これは神が与えた試練だとも言うようなカレン。

「そうですね」

常識に照らし合わせてみれば士郎がくらったモノは試練としては、

状況に比して重過ぎるのだが。

カレンも、そして彼女をマスターと仰ぐステッキも問題視するとはなかった。

「……それなら、そうと言ってくれれば……」

だから、地面にうずくまる士郎の意見は当然のごとく聞きながされることになった。

第四話 遭遇は、必然

「そういえば、遠坂の家に来るのは初めてだな」

落ち着きなく周囲を見回している土郎の言葉に屋敷の扉を解錠しようとしていた凜の手が止まった。

「前に、妹さんを送ったときは途中までだったし……」

「は？ 妹？」

土郎の言葉を聞き咎め、凜が振り返る。凜の口調にはトゲトゲしさがある。

「ああ。イリヤのお見舞いに来てくれたから、途中まで送ったんだ
よ」

なぜ、凜が妹という言葉に反応を示すのかわからないまま、土郎は答えを返した。

「……あいつ、妹を名乗るなんて、何考えてるのよ……」

凜は、彼女がイリヤのお見舞いに行ったのは知っていた。しかし、まさか土郎に妹を名乗って、見送りまでさせていたとは思ってもみなかった。

「えっと、なんか悪いことしたか？」

「いいえ。衛宮くんは何も悪いことしてないわ。詳しいことは、本

人に聞いてちょうだい」

先ほどから急転直下に凜の機嫌が悪くなっている様を目の当たりにして、今の彼女には逆らわないほうが良いだろうということを感じに悟った。

「彼女は後ろ暗い秘密があるから、自分の口からは話せないとそう言っているのです。そもそも魔術師の血縁関係というのは、策略や謀略、暗殺、毒殺、実験材料など、そういった話に事欠きませんから。告解ならばいつでも受けますよ」

しかし、こちらのカレンは凜の機嫌が悪くなるうとお構い無しで、言葉に刺を含ませる。しかも、後半の物騒な言葉を口にするに当たっては、酷薄な笑みを浮かべている。

「誰もそんなこと言ってないでしょ。全く、どっちのカレンも性格悪いわね」

もちろん凜も負けてはいない。仕返しとばかりに言葉の内に皮肉をたっぷり混ぜ込む。

「あなたにそう言って頂けるとは、光栄です」

目を閉じ、祈るように手を組んでカレンは静かに言う。だが、二人の間に吹き荒れるのはブリザードもかくやとばかりの冷気。

「……帰りたくなってきた」

士郎が頭を抱える。よくよく考えれば、魔法少女騒動に巻き込ま

れただけの自分。はっきり言えば、無関係なのではないだろうか。何より、この冷気にこれからも晒され続けることを考えれば、早急にここから離れるのが正解なのではないだろうか。

などなど。

非常に後ろ向きなことを考え、本気でここから立ち去ることを検討し始めていた。

「衛宮くんにだって、関係ない話じゃないかもしれないんだから、ここから逃げようたって、そうはいかないわよ」

凜はそんな士郎の制服の袖を掴み逃す気はないといった様子だ。

「『関係ない話じゃないかもしれない』って、一体どっちだよ」「それも、本人たちにぜひ問い詰めてちょうだい。あなたなら上手く突破口を作れるかもしれないわ」

口ではそう言うが、全く期待していない口調の凜。

「一体、誰に会わせたいんだ」

「……『妹』とその従者よ」

むしろ、衛宮士郎に彼らを引き合わせたい。

ずっと謎として付きまとっているアーチャーの正体ははっきりするかもしれないのだ。

だが、しかし。

残念ながら、彼らは今日もいなかった。

「ああ、もうっ！ 本当に、あいつらどこほっつき歩いてるのよ！
」

キーパーソンたちの不在の現実には床を踏み鳴らして、天井に向かって吠えたける凜がいた。

さて、リンたちの行方についてだが。

それを語るためには時間を早朝にまで遡る必要がある。

小鳥の鳴き声が響く。空は、綺麗に青く晴れ渡り登り始めたばかりの朝日が世界を照らします。

「それじゃ、アーチャーは新都の方をお願い。私は、深山町の方を回るわ」

アーチャーのクラスカードから現界した黒いイリヤを探しだすために並行次元移動組の二人は朝から街の巡回をすることにした。

「確率的には深山町の方に出てくるとは思っただけど、新都に現れないとも限らないしね……」

黒いイリヤの目的ははつきりしていない。だが、少なくとも、魔力の補給は必要になっている頃だろう。彼女は、クラスカードから魔力によって生み出された存在。生まれてすぐにアーチャーと一戦を交えているのだ。その消費した魔力を早急に補わなければ、消えることも有り得る。そうなれば、人の集まる新都に出てくることも考えられなくはない。

「もし、アーチャーの方にアレが出てきたとしても足止めだけに留めて。コイツじゃなきゃ、転移のためのエネルギーの回収はできないんだから」

自分の肩の上に止まっている愉快型魔術礼装の携帯バージョンであるルビーを指し示すリン。

「了解した。リン……アレは、早々に片をつけるべきだ」

リンほどの魔術師が目的を目の前にして手心を加えるとは思わない。しかし、イリヤとそっくりな見た目をしている彼女と接触する時間が長くなれば長くなるほど、情が移ることになるだろう。

「わかってる。見つけ次第、ケリをつけるわ」

アーチャーに言われるまでもない。

遠坂凜やルヴィアならば魔術師として感情を切り離すことは可能だ。しかし、イリヤ本人や美遊たちではそうはいかない。幼い彼女たちが黒いイリヤに情が移れば、やりにくくなるのは目に見えていゝ。だからできるだけ早急に、黒いイリヤがイリヤたちとの関わりを持つ前に決着をつけなくてはならない。

「わかってるのならば、いいのだがね」

「何よ、含みのある言い方ね」

アーチャーの言い方に、つい裏の意味があるのではないかと勘ぐってしまう。

「他意はない。心の贅肉はキミが一番嫌うところだろう？」

「ま、いいわ。今日のところは見逃してあげる」

「それはそれは。感謝するでしょう」

ひねくれ者主従によるヒネクレた軽口の応酬。

「では、マスターの命令通り、従順なサーヴァントは新都を見回ってくるでしょう」

最後まで捻くれた言動をしたあと、アーチャーは民家の屋根の上まで飛び上がり、そのまま新都の方へと消えていった。

「さて、こっちはこっちで」

「変身ですね!」

「違う!!--」

ポケたことをのたまうルビーに速攻でツッコミを入れる凜。

「ああ、つまり、変身しないで引張ることで視聴者の興味を引くということですね。第二期ですもんね。わかります」

「だから、違う!!--」

だが、ルビーのポケは止まらない。だんだん、ツッコミを入れるのにも疲れてくる。

「転移のエネルギー回収さえなければ、コイツを封印してしまえるの……」

頭を抱えたくなる。こちらの世界の凜は、コイツを手放すことになって正解だったと思う。四六時中コイツに振り回されずにすむのだから。

「ほらほら、リンさん。早く行きましょう。魔法少女として、街の平和と安全を守るためのパトロールは重要ですよ」

明らかに、わかっただけで勘違いしているセリフをのたまうルビー。しかし、意味合い的には微妙に合っているのが腹立たしい。

「ほんと、あなたと会話していると真面目にやっってるのがアホらしくなってくるわ」

「またまた。リンさんの突っ込みは、いつも冴え渡っていますよ。」

さすがは私のマスターです」

尊敬しちゃいますとルビーの大絶賛が入る。

「うるさいっ！ 本当にコイツと関わることを選択した過去の私が
うらめしい」

「まあまあ、過ちは誰にでもあるもの。それにリンさんからうっか
りを取ったら、可愛げのないツンデレしか残らないですよ？」

血の涙すら流しかねないリンに更なる追い討ちをかけるルビー。
そのルビーを、リンは驚掴みにした。

「もう、ダメ。もう、限界」

薄ら笑いを浮かべたリンはおもむろに、大きく振りかぶった。

「おやおや？ いいんですか？」

だが、ルビーは慌てず騒がずリンに話しかける。

「私を手放したら、元の世界に戻るあてがなくなりますよ。まさか、
優秀な魔術師のリンさんが感情に任せて、ぶん投げるなんて、考え
なしなこと、しませんよねえ？」

「ぐっ」

ルビーの正論にリンの動きが止まり、小さく呻く。

ギシギシと固い歯車を動かすようなぎこちない動作で、投球ポ
ズを解いた。

「さあて、お話し合いも平和的解決を見たところで、街の平和と安全と適度な騒動のため、パトロールと参りましょう」

「こいつと一緒にいる限り、私の精神の安定と安寧と適度な平安は、夢のまた夢」

誰にも聞いてもらえない支離滅裂気味な願いとも絶望ともとれないつぶやきをリンは思わず口にしていた。

サーヴァントはサーヴァントの気配がわかるが、魔術師である凜にその気配がわかるわけもない。だから、向こうの行動を予想した上での探索となる。

イリヤから生み出された黒いイリヤ。彼女がイリヤの周囲に現れる可能性が高い。しかし、昨日アーチャーと一戦を交えたことで彼女の魔力量は減少しているだろう。魔力で現界している彼女にとって魔力切れは致命的。イリヤに接触する前に魔力の充填をはかる可能性も捨てきれない。

だから、アーチャーには人の多い新都の方へと向かってもらっている。サーヴァントである彼なら広い新都であっても、そう多くの時間をかけずに探索行動を終了できる。

広範囲の探索が可能なアーチャーに対し、凜は出来るだけピンポイントでの探索が必要となる。

となれば、イリヤ周辺の警戒が必要となるのだが。

「アンタのせいで、黒イリヤを逃しちゃったみたいね」

イリヤは、学校の保健室のベッドで休んでいた。ベッドサイドで美遊が心配そうにイリヤを見ている。凜はその様子を窓の外から伺う。少しだけ開いている窓、そこから風の魔術を応用して、彼女たちの会話を盗み聞いたところ、どこからともなく植木鉢が落ちてきたり、トラックに引かれかけたりなど、死にそうな目にあっただらしい。かなり危険な場面もあったようだが、かすり傷程度ですんでいるあたりがイリヤらしいと言うべきか。

イリヤが登校中という短い時間帯で何度も危険な目にあっているのは、十中八九黒イリヤの仕業だろう。

「黒イリヤさんが、イリヤさんに狙いを定めているってことがわかっただけいいじゃないですか。このままイリヤさんに貼り付いていれば、黒イリヤさんにご対面できますよ」

凜の横で浮いているルビーが気楽に言う。

「それは、その通りだけど、それをアンタが言うか」

出発前のルビーとの漫才のようなやりとりさえなければ、間に合っていたのだ。

そんな会話を交わしている凜のすぐ脇を風を切り裂くような速度で、何かがすり抜けた。

「な！？ 攻撃！？」

「はい。でも、今のはリンさんを狙ったものではありません」

攻撃を仕掛けてきた相手を探すリンの耳元でルビーが告げる。

「イリヤさんを狙って、サッカーボールが保健室に飛び込みました。幸運にもイリヤさんは回避しています」

その報告を聞きながら、リンは攻撃してきた人物を目視で確認を取る。彼女は10メートル近く離れた場所の電柱の上にいる。

「黒イリヤ確認！　いくわよ、ルビー！」

「了解、変身ですね」

「だから違っっ！！！」

「え、変身して空を飛んでいった方が早いのに」

不満たらたらな声をあげるルビー。

「市街地で変身なんて、誰がそんな目立つ真似をするかっ！！！」

あくまでも変身にこだわるルビーを無視して、リンは強化した脚力で走り出す。

黒イリヤの方も、リンに気がつき即座にその場から離脱。

「誰が逃すか！！！」

リンが黒イリヤを追いかけ道路を走る。黒イリヤは屋根の上を跳ねながら公園の方角へと向かっている。

「そう、誘ってるってわけ。いいわよ、乗ってあげるわ」

わざわざ道路を走るリンから見えるように飛び跳ねて行く黒イリヤ。誘っているのが見え見えだが、リンはあえてそれに乗ってやる。

どちらにしても、彼女と接触をしなければエネルギーの吸収はできないのだから。

「あら、もう逃げるのはやめたわけ？」

郊外の森の中に降り立った黒イリヤの背中にリンが声をかける。

「ええ、ここまで来たら、もう十分でしょ。リンは、イリヤを殺すのを邪魔しそうだから、まず先に排除しようかなって」

振り返って可愛らしく笑う黒イリヤ。その手にどこからともなく二刀の中華剣が現れた。

「投影魔術。本当に、アーチャーの能力を使えるってわけね」

「ということは、魔力が有る限り無限に武器を取り出せるということだ。だが、戦いようはある。」

「仕方ない。ルビー、あなたの望み通り変身してあげるわ」

黒イリヤが『無限』ならば、ルビーは『無尽蔵』。リンにとって非常に気に入らないが、魔法少女に変身さえすれば、魔力の残量を気にせずに戦う事ができる。

「ほら、ルビー早く返事を……………って、あれ？」

いつもなら、煩いくらい変身変身と騒ぎ立てるルビーが
いない。

「……………っ！…！…！ あああああっ！…！…！ 置いてきた…！」

リンの絶叫が森の中に木霊した。

第五話 魔法少女たちは、戦闘中

「そう。ルビー置いてきちゃったんだ」

勝利を確信した黒リヤの唇が細く笑みの形になる。それはまさに可愛らしい小悪魔の笑み。

「あんなキチガイステツキなんかなくても、戦えるわ」

リンは懐から宝石を取り出して構えた。

「へえ。ただの魔術師が戦うんだ。どこまで出来るか、楽しみね」

黒イリヤもそれに応じて二刀を構え、余裕綽々の様子で挑発する。

「その余裕がいつまで続くかしら？」

アーチャーにはすでに念話でこの事態を伝えている。だからリンはアーチャーが来るまでの間、時間を稼ぐだけでいい。

「それに、ただの魔術師なんて甘くみない方が身のためよ」

だが、リンはアーチャーを待つて時間稼ぎなんてするつもりはない。ここで決着をつけてしまったほうが手っ取り早い。

「Anfang アーンファング …！」

先手必勝。

まずは、エメラルドを媒介に強風を巻き起こす。地面の砂を巻き

上げ、吹き荒れる風に黒イリヤがたじろぐ。

「ほら、まだまだ行くわよ!!」

Ein Fluse

in Halt (冬の河)……!!」

黒イリヤの足元に投げつけたサファイア。解放される魔力は、凍てつく冷気に変換され足元を凍りつかせる。

術式を石の中に閉じ込め、シングルアクション一工程で高度な魔術を展開する寶石魔術。その利点を最大限に生かし、息つく隙を与えずに、次々と様々な属性の攻撃を繰り出す。

「狙えFixierung, Eile Salve

!」

人差し指を構え、ガンドを打ち出す。彼女自身、自分の狙いが甘いことを理解しているからこそ、黒イリヤの足元を氷漬けにした上で、数を頼りにした連続掃射。

舞い上がる砂煙。黒イリヤの姿が完全に砂煙の向こうに消える。

「やりすぎたか」

黒イリヤを消してしまっっては、元も子もない。リンは一度、ガンドの手を止め砂煙が収まるのを待つ。

一陣の風が吹き、砂煙が払われる。だが

砂煙が晴れたあとに、黒イリヤの姿はなかった。

「どうして!?!」

周囲に視線を走らせる。

瞬間。

殺気を感じた。

「やっぱり強いね、リンは。手加減していたら、こっちがやられかねない」

声は、上から降ってきた。見上げた視線の先に、木の枝の上に立ち黒塗りの弓に矢を番えて構えている黒イリヤがいた。

矢からは魔力を感じ取れないから、あれは宝具などではなくただの投影品だろう。それでも、物理的な殺傷能力が高いことは想像に難くない。

ルビーがないリンにとって、その攻撃でも十分すぎる脅威だ。

その対処にリンが選んだのは回避でも防御でもない。

黒イリヤの本気の殺気を目の当たりにしても怯むことのない攻撃。赤い煌めきが、中空に舞い散る。それはリンが撒いた紅玉石の欠片。次の瞬間、周囲に空気が歪むほどの高温の炎が上がる。

「つく……」

黒イリヤが苦し紛れに、矢を放つ。だが、それも外れてしまうことなどわかっている。ただ、矢が炎を切り裂く一瞬が必要だった。

「見つけた!!」

黒イリヤは、木の枝の上から炎のただ中に向かって躊躇いなく飛び降りる。

「捕まえた！！」

リンを捕らえるために手を伸ばす。けれど、リンの姿は黒イリヤが触れた瞬間に霞のように掻き消えた。

「残念、外れ」

鈴を鳴らしたような涼やかな声とともに、黒イリヤの腕がリンに掴みとられ、地面へと仰向けに押し倒される。

「熱による空気の揺らぎを利用した幻。簡単な手に引っ掛かったわね」

馬乗りになつたリンが笑う。

「クスツ……引っかかったのは、どっちかしら？」

黒イリヤの赤い目が、妖しく煌めく。途端に、リンの体に目に見えない重圧がのしかかる。

「くっ……魔眼」

とつさに全身の魔力回路に魔力を走らせ、防御したその間隙に。黒イリヤはリンの唇を奪った。

「なああああに、やってんのよ!!!!!!」

黒イリヤが見事な飛び膝蹴りを喰らって、吹っ飛んだ。

「私と同じ顔して、キ……キ、キスって、何考えてるのよ!!!!」

仁王立ちになり、指を突きつけ顔を真っ赤にして怒鳴りつけるイリヤ。

「大丈夫ですか？」

その後ろで、リンを抱え起こす美遊。

「大丈夫、と言いたいところだけど……ごっそり魔力を持っていたわ」

リンが力なく答え、唇を噛む。

「あいつが魔力を必要としていることなんてわかってたのに、油断した」

自分自身の不甲斐なさに額を押さえる。

「ホント、危ないところでしたね。感謝してくださいよ。イリヤさんたちを案内したのは私なんですから」

美遊の肩の上から、ピョコンとルビーがリンの肩の上へと飛び降

りた。

「はいはい。アリガトウゴザイマシタ」

この状況では、確かにルビーに感謝すべきなのだろう。だがしかし、彼女にこれまで掛けられた迷惑を思えば、感謝の言葉に全く気持ちが悪くないのも仕方ないと言えた。

「リンさんは休んで。コイツは私がやるから。ルビー」

「はいはい。それじゃ、轉身行っちゃいましょう。緊急時のため、轉身シーンは残念ながら省略です」

イリヤに応え、彼女のルビーが出てきて一瞬で魔法少女へと轉身させる。

「サファイア、私も」

「了解しました。美遊さま」

美遊もサファイアに呼びかけ、轉身を行う。

「へえ、今度はあなたたちが相手になってくれるのね」

黒イリヤが立ち上がり、二振りの中華刀を両手に投影する。

「どっちにしても、あなたは殺すつもりだったし。ちょうどいいかも」

「そう簡単にやられるなんて、思わないでよねっ！！！」

イリヤが力を込めて、魔力弾を射出。しかし、それはあっさりと黒イリヤに弾かれ、明後日の方角に飛んでいく。

「手加減すぎですよ、イリヤさん。もっと本気で！！」

「くっ！！ もう一度、全力砲射フォイア！！」

ルビーの言葉に応じ、再び砲撃を放つ。だが、その砲撃も先ほどのそれと威力はほとんど変わらず、黒イリヤに弾かれる。

「へえ、イリヤ、弱くなってるんだ」

小さく口元に笑みを浮かべて、黒イリヤがイリヤに向かって駆ける。

「当然よね、私はここにいるんだもの」

黒イリヤの言葉の意味がわからない。けれど、今はそれを考察する時ではない。

「イリヤ、下がって。私が、前衛に出る！」

美遊がイリヤを庇うように前に出て、ステッキで黒イリヤの剣を受ける。しかし、黒イリヤの逆手の剣が横薙ぎに振るわれる。

とっさに飛び退いて、距離をとるが

「くっ……」

薄皮一枚だが、美遊の腹部があっさりと斬られている。

「そんな、物理障壁を切り裂くなんて……」

美遊が、血の滲む腹部を押さえる。この程度の傷はカレイドステツキによる恩恵ですぐに回復するが、それでもあっさり物理障壁を破られたことに対する驚愕は止められない。

「美遊さま、距離を取って戦ってください。彼女相手に、接近戦は不利です」

「わかった」

サファイアの言葉に、冷静さを取り戻し美遊は距離を取るために地面を蹴りながら、魔力弾を目くらまし代わりに打ち出す。

カレイドステツキは基本的に中距離の攻撃を主軸として想定されている。中には、カレイドステツキで近距離戦を挑むような魔術師もいるが、それは例外。平行次元から汲み上げる魔力を効果的に運用し活用するなら、それが最も効率的な戦い方になる。

しかし、この場においてそれは弱点となりうる。

「ん〜遠距離戦は望むところだけど……ここは、距離を詰めておこうかな」

その弱点を黒イリヤは見逃さない。

軽やかに上方向へと跳ねて、美遊の魔力弾を全て躲す。黒イリヤの動きに美遊の魔力弾はついていけず、後追いするように射出され掠めることもできない。

「せっかくの弱点だもん。利用させてもらわなくっちゃ、ね」

美遊の後ろに着地。振り返る美遊が次の動作を取るより早く、彼

女の手を捻りあげてサファイアを奪い取る。

「あっ」

美遊には声をあげる以外の動作はできなかった。

黒イリヤは、バッティングの要領でサファイアを空へ向かって打ち放った。

「美遊さまあああああ

……」

サファイアの声が空の向こうへと消えていく。

パチンと風船が弾けるような音がして、美遊の変身が解けた。

「カレイドステッキの弱点その二、ステッキが手から離れて30秒経過するか、マスターと50m以上離れると転身解除。ちゃんと握ってないと、ダメじゃない」

愛らしく美遊に微笑みかける、黒イリヤ。

「クス、それじゃ、大人しくしていてね」

ステッキを失った美遊にはこれから起こるイリヤと黒イリヤの戦いに対して手出しする方法はない。

「お待たせイリヤ」

そして、黒イリヤはイリヤと向き合う。

「……………さっきから思ってたけど」

「何よ？」

「あなたの存在って……」

自分と同じ顔をした敵。その存在そのものが、

「すんごい、キモい」

魔法少女にあるまじき、ひどい顔をして呟く。

「キモいとはなんだあああ！！！！」

ぶち切れた黒イリヤが、駆け出す。その手には無骨な黒い中華刀。

「こつちこそ、あんたの存在そのものがムカツクのよ！！」

振り下ろされた刀をイリヤはステッキで弾く。

「刃物をブンブン振り回さないでよ！ 怖いからっ！」

「あなたが殺されてくれたら、やめてあげるわよ」

「誰が！！」

同じ顔をした二人が、互いの武器を合わせる。

「んにゃろっつー！！」

イリヤがステッキに魔力を込め、半ば強引に振りぬく。

黒イリヤとの距離が広がる。

自身の砲撃では黒イリヤに効果がないのはわかっている。
ならば

「シュナイデン
斬撃！！！！」

魔力を薄く細く、刃のように研ぎ澄まして放つ。例え、魔力の出
力が落ちていても、絞り込まれた魔力ならば、威力を上げることが
できる。

「痛ったあ……」

直撃を受けた黒イリヤが顔をしかめる。

「……効いた、けどっ」

黒イリヤを見て、イリヤが心底嫌そうな顔をする。

「なんで、裸！！！！」

黒イリヤの身につけていた衣装が、ボロボロと崩れ落ちる。

「あーあ。これじゃ、もう戦えないわね」

黒イリヤは、はだけた胸を押さえながら軽く口笛を吹く。

「今日のところは、これで見逃してあげるわ。でも、油断したら
殺しちゃうからね、お姉ちゃん」

ヒラヒラと手を振って、黒イリヤが跳ねる。

「そつだな、油断は禁物だ」

その彼女に向かって、どこからともなく少年の声が聞こえたかと思つと、上から赤い布が降ってきた。

「わきゃ!?!」

すつぽりと赤い布に覆われた黒イリヤはバランスを崩して、その場に盛大にすつころぶ。

「捕獲完了」

地面に降り立ったアーチャーは、もがく赤い布に包まれた塊を小脇に抱える。

「人を猫みたいに抱えるなあ! はなせ!」

赤い布をまくり上げて顔を出して黒イリヤは暴れるが、アーチャーはびくともしない。

「助かったわ、アーチャー」

事の成り行きを見守っていたリンが息をつく。

「ふむ。だが……少々芳しくない展開になりそうだな」

本来ならば、イリヤや美遊たちには知られないまま事処理したかったのだが、この状況では、そうも言っていられないだろう。

「そうね……こうなったら、なるようにしかならないんじゃないかしら」

「ところで。キミはいつまでそうして、地面にへたりこんでいるつ

もりだ？」

地面にしゃがみこんだまま立ち上がるうともしないリンに、アーチャーが尋ねる。

「……魔力をこっそり持つてかれたせいで、立てないのよ。このルビーが魔力供給をしてくれれば、問題ないってのに」

「私を置いていったバツですよ。ちょっとは、反省しやがれっつものです」

魔法少女に変身して、魔法バトルというルビーにとっては血湧き肉躍る展開に運べたというのに、どこかの誰かのうっかりのせいで活躍の場をふいにしたのだ。ルビーは不機嫌に羽根を組んでそっぽを向く。

「くっ……このバカ杖……あとで覚えてなさいよ」

リンが凄んで見せるが、へたりこんだままでは迫力に欠けている。

「あの、アーチャーさん。これから、どうするんですか？」

なんとも情けないマスターの姿にため息を吐き出しているアーチャーに美遊が声をかける。

「さて、どうすべきか」

現段階では、望んでいた展開には持ち込めそうもない。

どうやっても抜け出せないことを悟り、取りあえず大人しくされるがままになった黒イリヤを見下ろして、アーチャーはため息を吐き出した。

第六話 魔女の館は、大騒ぎ

「たしかに、貴方をお呼びたてしたのは私ですが、どういふことが説明していただけますこと？」

優雅に髪をかきあげて、ルヴィアは来訪者に問いかける。

「私がわざわざ貴方を屋敷に招いた理由は、簡単に説明しておいたはず。なのに、無関係な人を連れてくるなんて、非常識にもほどがありますわ」

ルヴィアの機嫌は急降下で悪くなっている。
それも無理はない。

彼女が呼びつけたのは、遠坂凜一人だけ。だというのに、彼女は一般人を二人も連れてきているのだから。

「関係なかったら私だって連れてこないわ。こいつらは、関係者よ」
凜がニコリともせず無表情に切り返す。

「シエロがなぜ、関係者だと言い張るのです？」

同級生の衛宮士郎と、銀髪の小学生くらいの少女。それが、凜が連れてきたメンバーだ。

「私たちだって、一度は衛宮くんとアーチャーの関係を疑ったじゃない」

以前、衛宮士郎があまりにもアーチャーに似すぎていることがつき、彼らに詰め寄った。しかし、その関係性については何もわからず現在を持って、調査中である。

とはいえ、それが彼をここに連れてくる理由になりはしない。

「それとこれとは違いますわ。私は彼が一般人であることを」

「一般人じゃないわよ、コイツ、魔術師」

ルヴィアの言葉を遮って、凜は士郎が魔術師であることを明かす。

「は!?!」

淑女であることを己の誇りとするルヴィアが、間の抜けた声をあげて士郎を凝視する。

「えっと……」

そんなルヴィアに対して、たじろいでしまう士郎。

「一応、こんなんでも魔術師らしいわよ」

「嘘ですわ! 魔力の欠片も感じ取れませんもの」

凜の言葉をルヴィアは即座に否定する。魔術師であれば、アーティファクトなどで隠さない限り、魔力を感知できなければおかしい。しかし、士郎がアーティファクトを使っている様子はない。

「いいえ。彼が魔術師であることは、私が保証します。衛宮の姓を受け継ぐ彼は、間違いなく魔術師です。もっとも、魔術師と名乗るのもおこがましいほど未熟ですが」

土郎がかろうじて魔術師であることを保証したのは、凜が連れてきたもう一人の少女の方だった。

その土郎は『魔術師と名乗るのもおこがましいほど未熟』という少女言葉に大ダメージを受け、彼女の隣で意気消沈している。そのシヨックは放っておけば地面にしゃがみ込み、いじけてしまいかねないほどだ。

しかし、この場にはそんな彼に優しい言葉をかけるモノなどおらず、そのまま会話が展開されていく。

「……あなたはどちらさまですか？ できれば、自己紹介を願えますか？」

会話に割って入った銀髪の少女へとルヴィアは話を移す。少女はおそらくイリヤたちと同年代だろう。魔術に通じている幼い少女がこの街にいるなど、聞いたこともない。ゆえに、ルヴィアは強い警戒でもって少女を見る。

「自己紹介が遅れて申し訳ありませんでした。私は、カレン・オルテンシアと言います。この世界では初めてお目にかかることになります」

「この世界……ということとは、もしかして……」

その言葉でルヴィアはすぐにある可能性に思い至る。

「ええ。ご察しの通り、どこかの誰かのせいで並行次元を移動させられたのですよ、ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルト」

ルヴィアは、彼女が手に持つステッキを見る。何よりカレンと名乗った少女は、ルヴィアのフルネームをあえて口にした。それは、

彼女のファミリネームが持つ意味を十全に理解しているという意思表示でもある。

「なるほど。そういうことならば、貴方も関係者なのでしょう」

息をつく。こうなつては、彼らも屋敷のなかに招き入れるより他にない。

「当エーデルフェルト家へ、ようこそおいでくださいました。エミヤ・シロウ、カレン・オルテンシア。エーデルフェルト家当主としてあなた方を歓迎いたします、どうぞこちらへ」

ルヴィアは優美な仕草で、招かれざる客を招き入れた。

「アンタの家つて、ホント無駄に広いわね。っていうか、これ空間ねじ曲げてない？ 明らかに広すぎだと思っただけけど」

凜が呆れて、ため息をつく。

案内されたのは、地下室。

ロウソクの灯りに照らし出される床の得体のしれない魔法陣、大きな魔女の釜が暖炉に掛けられ、紫色の液体から白い湯気が立つ。壁際には、分厚い本がいくつも並ぶ本棚。部屋の隅には大きい宝箱

のような木箱まである。

一般人が魔女や儀式というものを想像したときに思い浮かべるものがだいたい揃っており、まさに魔女の館という様相を呈している。そして部屋の中央に据えられているのは、生け贄のごとく十字架に赤い布で嚴重にくくり付けられた少女。

「な！？ イリヤ！！！」

士郎が驚きに声を上げ、彼女の名を呼ぶ。十架にくくりつけられているのは、彼の妹なのだ。すぐにも彼女の拘束を解いてやるために駆け寄ろうとしたとき、彼の腕を掴む者がいた。

「余計な真似はしないでもらおうか」

抑揚を押し殺した低い声に振り返ると、浅黒い肌をした白い髪の少年が士郎の腕を掴んでいた。

「離せ！ イリヤが！！！」

士郎はその腕を振りほどこうとするが、強い力で握られびくともしない。

「このっ！！！」

「お兄ちゃん！！！」

士郎が思わず殴り掛かろうとしたとき、それを止めたのは妹本人の声だった。

しかし、その声は十字架にくくり付けられた少女からではなく、その斜め向こう側から発せられた。

「は？」

そこにもイリヤがいる。

もう一度、部屋の中央を見る。十字架に張付けられたままのイリヤがいる。

「イリヤが、二人？」

何が起こっているのか理解できず士郎は惚けた声をあげる。

「ちょっと、これはどういうこと？　なんで、こんなにゾロゾロと見学者がくるわけ？」

士郎の腕をつかむ白髪の少年の隣にいる小学校低学年くらいの黒髪の少女が、不満を隠すことなく凜を睨みつけた。

「色々あったのよ。貴方たちが蒔いた騒動の種のせいだね」

凜は、嫌味で返す。

「どつという意味よ、それ」

「どつもどつも、ないかと」

凜の前に進み出るのはカレン。

「カレン！？　あんだ、何？　その格好は？」

リンは一目見て彼女がカレンであることを看過するが、彼女が幼い姿をしている理由がわからず、疑問の声を上げる。

「この期に及んで、その態度とは……ポルカミゼーリア」

イタリア語が堪能でないリンでも、彼女の言葉に品のよくないスラングが混じっていることはわかった。

「質問するだけで、なんであなたに罵られなきゃならないのよ」

「はあ……そこからの説明を必要とするのですか。何もかも、貴方のせいだと言うのに」

これみよがしに疲れたような息をつくカレンと彼女を睨みつけるリン。彼女たちの間には友好的な関係が築かれそうもない。

「一体、なんでイリヤが二人もいるんだ！？それに、いつまで俺の腕をつかんでいるつもりだ？」

「ふん。離せば余計なことをしでかすに決まっている」
「するかよ。だから、離せ」

そしてこちらでも、言い争いが起こっていた。

土郎の訴えに、アーチャーはこれ見よがしにため息をついてから腕を離す。

「つてえ。痣になってるし」

「その程度で泣き言とは」

「事実だ！！」

嘲笑するアーチャーと、噛みつく土郎。

犬猿の仲。

その言葉を表すかのように、いがみ合う二人。今は言い争いだけだが、いつ手が出てもおかしくはないほどに、二人の間にある空気は険悪だ。

「いい加減話を進めてもらえないかしら。そもそも、こんな拘束されなくても私は誰かに危害をくわえるつもりなんてないわよ」

十字架に拘束されたままの黒イリヤが、いつまでたっても本題に入らず好き勝手に話している彼らの様子を見て唇をとがらせつつ愚痴を続ける。

「イリヤ以外には」

「それが、問題なんですよ！！！！」

黒イリヤの言にイリヤが指を突きつけ突っ込みを入れる。

それぞれが、それぞれで言いたいことを口にするモノだから、場が騒然とし収拾がつかなくなりつつあった。

第七話 魔術師たちは、かく語りき

「静かに!!! いっぺんに話したら、進む話も進まないじゃない」

好き勝手に話を始め收拾の着かない状況を収めるため、凜が声を張り上げる。

「ややこしいぐらいに、状況が絡まってるんだから。一つ一つ解きほぐしていかないと、さらにややこしくなるだけでしょうが」

凜の正論で、とりあえずその場に話し合いをもつことができる程度の落ち着きを取り戻した空気が生まれる。

「まずは……そうね。衛宮くん、あなたの話を聞かせてもらいたいんだけど」

流れの都合上、凜が司会役として話を進める。

この先の話は、秘匿性の高い魔術の話となる。となれば、まずはこの場にいる資格があるのかを士郎に証明してもらう必要がある。彼からは、魔術師であることは聞きはしたが、それが事実であるかをまだ確かめていない。

「俺の話って言っても……そんな大層なモノは」

「あなたに大層な話なんて期待してないわ」

士郎は、凜の辛辣な言葉選びに少なからず驚く。普段、学校で目にしてる優等生の姿とあまりにかけ離れているからだ。

彼女の様子は、一度だけ校庭裏に引きずり込まれて詰問を受けたときのソレを思い出させる。

「それに、ここから先の話では私たちも相応の手札をさらすことになる。なら、あなたにも少しは手の内をさらしてもらいたいと思うのは当然でしょう」

「それって……俺が使う魔術を知りたいってことか？」

当然のことながら、士郎は躊躇いをみせる。

「大丈夫よ。この場にいる全員は、魔術のことを知っているのだから」

「な！？ イリヤも？」

凜の言葉に士郎は驚きの声をあげる。

「う、うん。なりゆきというか、なんていうか、まあ色々あって……」

イリヤは戸惑った様子で口ごもりながら答えた。その『色々』の部分の説明しようとする、かなり話が長くなってしまふ。

「……ったく。そういうことが」

だが、士郎の方はその『色々』な部分を説明する前にあっさりと納得してみせた。

「お兄ちゃん……？」

それが理解できず、イリヤは首をかしげる。

「この春、なにか面倒なことに巻き込まれてたんだろ」

「え、気がついて……」

言葉に詰まる。

クラスカードにまつわる騒動は、全て真夜中の出来事。家族には気がつかれないよう、十分に注意を払っていたというのに、バレていたのか。

「ま、一応な。最初は、なんか様子が変わってた程度だったけど……アイリさんが一時帰国した日が、決定的だったかな」

「そっか……バレてたんだ。……ごめんなさい」

「なんでイリヤが謝るんだよ」

肩を落とすイリヤに士郎が苦笑する。

「妹が苦労してるときに、なんにも気づいてやれなかった俺の方が謝るべきだろ」

士郎はひどく申し訳なさそうな顔をして、イリヤに頭を下げた。

「ううん。お兄ちゃんは、なんにも悪くないよ。隠してたのは、私だし」

慌てて大きく首を横に振るイリヤ。そんな顔をさせたくて、隠していたわけではない。ただ、命がけの戦いに巻き込みたくなかっただけなのだ。

「とりあえず、その辺りの話はあとで聞かせてもらおうよ」

「うん。ちゃんと話す」

素直にうなずく。ここまでできてしまっただけは、士郎に隠していても

仕方ない。

「でも、お兄ちゃんが、魔術師ってどういうこと？」

自分の家族に魔術師がいたなんて、イリヤには信じられない。

「あ〜、ええっと……」

士郎はどう説明したものかと、口ごもり眉根を寄せる。

「衛宮くんは、魔術回路を作ることができる。だから魔術師。そういうことよ」

その言葉は、リンのものだった。

「あのねえ……平行次元の別世界から来た人間に、こちらの人間のことを証言されても納得できるわけもないでしょう？」

「ま、それもそうね」

少し考えてから、リンは凜の言葉を肯定する。

リンたちは、この世界の衛宮士郎が魔術師であることをイリヤに關して調査をしたときに確認している。だが、それをわざわざ説明するまでもないと判断した。

余計な勘ぐりをもたれては、面倒だというのが一番の理由なのだが。

「それでも、根拠の一つくらいにはなるでしょう。どうせ、そのへっぽこ魔術師は強化くらいしかできないのは、一緒でしょうし」

「へっぽこって……その通りだし、確かに強化しかできないけど…

…もう少し、言い方を……いや、なんでもないです」

リンの容赦のない言い方に文句の一つも言おうとしたが、彼女の「本当のことでしょ」とでも言いたげな視線に押し黙る。これ以上反論すると、さらに辛辣な言葉が出てくるのがなぜか確信できた。

「というか、平行次元の別世界ってどういう意味だ？」

リンの容赦のない言葉に傷つきながら、士郎が首をかしげる。カレンもその言葉を使っていたのだが、その意味まではこれまで確認することができなかった。

「言葉通りの意味よ」

「……まさか、平行世界の運用か？」

それは、魔法の領域だ。現在、その魔法を使える者はただ一人、宝石翁キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグだけのはず。

「あら、魔法のことを知っているのね」

「どついうことだ？ キミは遠坂の妹じゃないのか？」

士郎はリンに質問を重ねる。以前、イリヤのお見舞いに来たとき彼女は遠坂の妹を名乗っていたのだ。

「ええ。私は、別世界の遠坂凜。こことは少しずれた歴史の流れをたどっている世界から転移してきたのよ」

「は？」

平行次元の移動など、まさに魔法使いでもなければ不可能な話をリンにあっさり肯定され、士郎は呆然とする。

「ああ、もう。つまりね……」

「放っておけ、マスター。頭の回転の鈍い小僧が全てを理解するには時間がかかる。それにキミが付き合う必要はない」

さらに説明を続けようとするリンをアーチャーが止める。

「何より、アレに私たちの出自を理解させる必要などない」

「ちよつと待て。お前一体何者なんだ。さつきから人に敵意を向け
てきやがって」

あまりの言いようにさすがの士郎も我慢ができなくなった。噛み
つくように、アーチャーに詰め寄る。

「敵意？ なぜ、貴様ごときにそんなものを持たねばならん」

「な!？」

アーチャーの取り付く島もない態度に、士郎が声を荒らげる。

「はいはい。こんな場面で、喧嘩しない」

間に割って入ったリンが、とりあえず場をとりなす。

「……なんていうか、あんなお兄ちゃんってちよつと珍しいかも」

他人に対してあまり執着や悪意を見せない士郎が、こつもあから
さまに感情を露にする様子にイリヤが少し驚く。

「そうね。アーチャーさんの方も、なんだか苛ついているみたい」

美遊の言葉で、イリヤはアーチャーの方も観察してみる。一見すると、無表情だったが、身にまとう雰囲気とでも言うべきモノがいつも以上に尖っている感じがした。

「で、私、いつまでこうしていればいいわけ？」

年少組がそんな会話をしていると、礫にされたままの黒いイリヤが退屈そうに声を上げた。

「あなたは、メインディッシュってことで、後回しよ」
「あっそ」

凜の擲楯に文句の一つも言うかと思っただが、意外なほどあっさり
と黒いイリヤは引き下がる。

「とりあえずここまでの話をまとめておくと、衛宮くんはへっばこ
魔術師ってことで間違いはないわね。それで、そっちの二人組は平
行次元からきたもう一人の私とサーヴァント『アーチャー』よ」
「ということは、そっちの遠坂は魔法使いなのか？」

『へっばこ』については、異論も反論も許される状況ではない
ため、言及はあきらめる。だが、リンが魔法を使えるのかについて
は確認しておくべきだろう。

「まさか」

あっさりとそれを否定するリン。

「偉大な魔法使いが残した、迷惑きわまりない魔術礼装がノリと勢
だけでやらかしてくれたのよ」

持っている女の子のおもちゃのようなステッキを振って示す。

「なんだそれ？」

いぶかしみ、眉根を寄せてリンが持っているステッキを見る土郎。

「愉快型魔術礼装、カレイドステッキのルビーちゃんですよ。以後お見知りおきを」

「んな！？　しゃべった？」

その奇っ怪さに、土郎は後ずさる。

「おやおや、随分と失礼な態度ですね。向こうの世界の土郎さんとは、二人っきりの世界を創ったこともあるというのに、残念でなりません」

「は？」

こんな怪しげな物体と一体何をやらかしているんだ。

違う世界の俺は。

違う世界の自分のこととはいえ、強い不安を抱く土郎。

「あんたは、またそうやって物事を曲解させるような言い方をするわね。心配しなくても、大丈夫よ、衛宮くん。むしろ、あなたは…被害者だったわ」

「それは…余計、不安になる」

リンのフォローとともに向けられる哀れみの視線に、土郎はそれ以上の話を聞くことを避けるべきだと理解した。

「さて、こつちの話はこのくらいね。それで、そろそろなんであな
たがここにいるのかを説明してもらえるかしら、カレン」

「私の話など、何もありません」

リンに話を振られたカレンは抑揚もなく、はっきりと答える。

「他ならぬ、あなたによってこの平行次元へと送り込まれた。それ
だけのことです」

「それだけ？ 馬鹿言わないでよ。それだけっていうのなら、その
キチガイステッキのサファイアを持っていいのかしら？ それに、
私はこんな面倒な騒動に関係ない人間を巻き込むほど伊達でも酔狂
でもないわよ……って、何よ、アーチャー文句ある？」

アーチャーが無言でしかし喉を鳴らして笑っているのに気が付き、
リンはねめつける。

「いや、単に納得しただけだ。伊達や酔狂では面倒な騒動には巻き
込んでいないな、と」

『うつかり』でこの騒動に巻き込まれているアーチャーの言。

「……………と、とにかく、若返っていることとか、そのステッ
キのこととか、説明しなさいよ」

長い沈黙のあと、リンはアーチャーの言葉を聞かなかったことに
して話を先に進める。

「なぜ、私からそれを説明する必要があるというのですか？ むし
ろ、私が説明を求めたいくらいだというのに」

これ見よがしなため息とともにほき出された言葉は、淡々としていながら相手を卑下する感情を隠しもしていない。

「あつそ。それなら、別にいいわよ」

リンはそんなカレンの言葉をあっさりを受け流す。

「こつちが悔しがっても意味がないでしょう」

しかも、彼女に対しての交渉の材料がこちらにはない。これ以上の追求は無駄だろう。

「おや。もう少し粘るかと思ったのですが、随分と簡単に引き下がりますね」

「こつちが食い下がったとしても、あんたが愉しむだけのくせに」

「見抜かれているとは……残念です」

さして残念がる風もないカレン。

「それはそれとして、そちら側の説明をしてはいただけませんか？
どうやら、一般人を巻き込んでいるようですし」

カレンがちらりと視線を送るのは美遊。
その視線に、美遊の肩が小さく震える。

「ちょっとした、事故……のようなものですわ」

カレンの視線を美遊から自分へと向けさせるようにルヴィアが一歩前に出る。

「私は、こんな極東の辺境の地などに来るつもりなど、全くありませんでしたもの。それでも、この冬木で起こる魔術絡みの事件を解決すれば、魔法使いの弟子になれるとなれば、参戦しないわけにはいかないでしょう」

胸に手を当て、嫣然と微笑んでみせるその表情はまだ若いながらも当代随一といわれる魔術師の自信に満ち溢れている。

「よせばいいのに、どこかのおまぬけな魔術師も名乗り出たようですけれど」

「うるさいわよ、ルヴィア。余計なことはいいから、さっさと話を進めなさい」

軽い応酬はあるが、凜もルヴィアもそれ以上はやりあうつもりはないようである。

「その任務のために貸し与えられたその魔術ステッキたちが、勝手にマスター権をこの子達に移し替えたのよ」

凜は端的に話をまとめる。

「あらま、何たる言いぐさでしょう」

「私たちは、ただふさわしいマスターを求めただけです」

異口同音に自分たちは悪くないと主張するのは、自分たちがマスターとして選んだ少女たちの手の中にある、こちらの世界のルビーとサファイア。

「その平行次元から移動してきた二人組の介入という紆余曲折も

ありましたけれど、冬木の事件はおおむね解決したと思っております」

あえてルヴィアは、冬木の事件については詳しく語らない。

それについてカレンからの追求はない。自身も隠していることがあるから言及をさけたのか、あるいは他の理由があるのか、無表情で話を聞く彼女からは見当が付けられない。

「ところが、冬木の地脈の改善が見られず、昨日その改善のための式を実行したのですが……」

そこで、視線を礫にしている黒いイリヤの方へと向ける。

「どういった現象か、彼女が唐突に出現したというわけですわ」

自然と、全員の視線が黒いイリヤの方へと向かう。

「彼女の話も出たところだし。それじゃ、そろそろメインディッシュを片付けましょうか？」

凜がこの会合のしめくりになるであろう、黒いイリヤへと話をするために向き直った。

刻まれた刻印は、痛覚共有

「あら、やっと私の話？」

はりつけにされ、みじめな姿をさらしているというのに黒いイリヤは嫣然と微笑む。その様子は、まるで高貴な姫君のようである。

「それじゃあ、まず、貴方の名前は？」

「イリヤよ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン」

「言い忘れたけど、嘘をつく権利なんてあると思わないでね」

「失礼ね、嘘はつかないわよ。隠し事はするけど」

「あなたの目的は？」

「イリヤを殺すこと、かな？」

「なら、自分の首を絞めればいいじゃない」

「私じゃなくて、あっちのイリヤのことよ」

凜の矢継ぎ早の質問に、淡々と答える。

「ああ、もうややこしい。面倒だから、あなたはクロでいいわね」
「拾ってきた猫の名前の付け方ね。どうせ、私に拒否権なんてないんですよ」

頬を膨らませてはいるが、強く拒否する様子はない。

「それで、貴方は何者？」

その質問を受けたクロが見たのはリンとアーチャーの二人。クロ

の意味ありげな視線に、自然とほかのメンバーたちも二人を見ることになる。だが、彼らはそんな視線など気にする風もなくクロの答えを待っていた。

「秘密。ネタバレにはまだちょっと早いでしょ」

コケティッシュな表情を見せるが、どこか小悪魔的だった。とても普段のイリヤから想像つかないような表情だが、思わず見惚れてしまうほどによく似合っていた。

「そつちの二人は、何か意見があるかしら？」

凜は、平行次元移動組の二人に意見を求める。その意味するところはもちろん先ほどのクロの視線を含んでのものだ。

「そんなに警戒しなくても、今は何かを仕掛けるつもりなんてない

よ」

「『今は』、ね」

含みのある発言に凜は顔をしかめるが、それ以上は何も言わない。

「で、他のメンツは何か言葉ある？」

「俺から話しても構わないか？」

その発言は士郎からのものだった。

「構わないわ、何？」

「キミはなぜイリヤを殺そうとしているんだ？」

士郎は凜の促しに応じ、クロに向かって率直に問いを放つ。

「っ……だつて！」

その問いは、クロにとって痛いところをつくものだったのだろう。
一瞬だけ、泣きそうな顔をした。

「そんなの、お兄ちゃんに関係ないわよ」

感情を押し殺した表情をして顔をそむける。

「関係ないって、そんな……」

「それじゃ、お兄ちゃんは私を助けてくれるの？」

「そんなの決まってるだろ」

迷いもなく即答する士郎の方へとクロは向き直る。

「じゃ、あっちのイリヤを殺して」

こともなげに言い放ったクロの言葉。

「そんなこと、」

「できるわけがない、でしょ」

呻くような士郎の言葉の後をクロが引き継ぐ。

「だから、お兄ちゃんには関係ないの。これは、私とアイツの問題
なんだから」

クロがイリヤを睨みつける。その視線に気おされ、イリヤは一步
下がった。死を望むほどの強い感情を受け止められるほど、イリヤ

は強くない。

「そうはいうけど、私としてはイリヤを殺されては困るのよね」

そのイリヤを庇うよう凜が立つ。

「そっちの事情なんか、知ったことではないわ」

「でしょうね。だから、イリヤに関する抑止力を作らせてもらおうわ」

「抑止力って、何をするつもりなんだ」

凜の言葉に反応を返したのは、士郎だった。

「ちよつとした呪術をかけさせてもらうのよ」

わずかに声を低くして凜が士郎に応じる。

「呪術って、そんな……っ」

「なら、衛宮くんはイリヤがどうなってもいいってわけね」

凜は士郎の言葉を途中でさえぎるような形で、反論をかぶせる。

「そんなこと言ってないだろ、俺は他にやり用があるんじゃないかって、」

「そこまですよ」

言い返している途中で袖を引っ張られる。見るとリンが呆れ顔をしていた。

「イリヤとクロに殺し合いなんてさせたくないでしょ。なら、イリ

ヤが殺されないように仕掛けをする必要があるのは、わかるわよね」
噛んで含めるようなリンの言葉と、まっすぐ見上げてくる視線。

「それは……そうだけど、でも……」

士郎も理性ではそれが正しいとは理解できる。しかし、感情がついていかない。もっと他に方法はないのかと思ってしまつことは止められない。

「それ以上、ただをこねると部屋の隅に転がすわよ。アーチャーが」

リンの言葉で、彼女の隣を見る。そこには無表情でありながら、射殺せそうなほど鋭い眼光を向けるアーチャーがいた。

「……わかった」

部屋の隅に転がされることになったら、その時は生きてないな、きつと、たぶん、おそらく。

理由も何もないが、そう確信できた士郎はうなずくより他に選択肢は与えられていなかった。

もっとも、士郎にしてもイリヤとクロが殺しあわなくてもすむように、なんらかの処置を行うことは必要だと考えている。

「だけど、抑止力って一体何をするつもりなんだ、遠坂は」

式は着々と進行している。

イリヤから採取した血液を宝石にたらし、呪文を唱えながらその血でクロの腹部に呪刻を刻む。

「ああ、なるほど。あの術なら抑止力としては適切ね」

彼女たちが何をしているのか理解できず首をかしげる土郎の横でリンがうなずく。

「わかるのか？」

「まあ、ね。そう複雑な術じゃないし」

リンの言葉通り、式の最後は呪刻にイリヤが手を置くことであっけなく終了した。

「あれは『人体血印呪術』その効果は、痛覚の一方的な共有」

その様子を横目で見ながら、クロにかけた術の意味を解説する。

「つまり、呪刻を刻んだ相手に、痛覚を一方的に伝える。とても単純な分、強力なものよ」

リンの説明の合間にも、凜たちは実験的にイリヤに痛みを与えクロにそれが伝わることを確認していた。

「ということは、クロからイリヤに攻撃を仕掛ければ、その痛みが伝わるから手を出せなくなるってことか」
「そういうこと」

どうやら、呪術の仕上がりは上々らしい。イリヤの痛覚は確実にクロに伝わっている。それをクロに実感させたうえで、この呪術が強力な呪いであることを強調している。

こういった呪術は本人の『思い込み』というのも、作用に大きく

影響する。強固な呪いであると信じさせることも重要だ。

「けどさ、どうして遠坂があんな呪術を知ってるんだらう？」

ぼつりと土郎の口からこぼれた素朴な疑問に、リンの体が大きく震える。

「さあ？」

リンの態度が挙動不審になるのは、凜が呪術などという魔術師にとっては邪道ともいえるモノを研究する理由に心当たりがあるからだ。

「まあ、遠坂の魔術は流動と転移を得意としていて、そっち方面からの根源の到達を指摘しているから、その研究の一環として呪術にも手を出してみたんじゃないかしら？」

他人事のようにもつともらしい理屈を並べたてると、土郎はその答えに納得したらしい。

まさか、ルヴィアに対抗するため、などと言えるはずもないリンは、ごまかせたことにホッとする。

「リン、戻るぞ」

アーチャーに呼び掛けられて、クロについての話し合いが終了していることに気が付いた。どうやら、クロの身柄についてはこのままルヴィアが預かることになるらしい。

「……そうね」

魔術的な要塞となっているルヴィアの屋敷の預かりになってしま
うと、クロに手出しがしにくくなってしまふ。かといって、今はそ
れについて対処できる状況にない。だからリンはアーチャーの促し
にしたがって、地下室を出る階段に足をかける。

「なあ、遠坂。もしかして、前に言ってたアーチャーってあいつの
ことか？」

その時、凜に話しかける土郎の声が聞こえてきてリンは足を止め
た。

「ええ、そうよ」

背後で、土郎の質問に肯定する凜の声が聞こえてくる。

「何か、心当たりはある？」

リンやアーチャーにもこの会話が聞かれていることを承知の上で
凜は土郎に確認する。

「いや」

土郎が首を横に振って短く答える。

「アーチャー、行きましょう」

リンは、彼らの会話を背中聞きながら地下室の階段を上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3553o/>

プリズマ イリヤクロス2wei

2011年10月11日08時56分発行